手の名、即、主語を云はさるも意味が通ずるから、略するのだといふこと。

(6)姉さんが妹にお願ひしたのか。命令したのか。獨語したのか。(命令文の說明)。

(五)教科書を開かしめて讀方を練習せしむ。

(六)本を離れて、話方の練習をなさしむ。

第二時

教材　テヲヒイテアゲマス。

要項

內容＝前時の復習。

形式＝「テヲヒイテアゲマス」の話方、讀方、書方、綴方、及び「ヲ」「ゲ」の發音。

教具　教科書挿繪の廓大圖。

教材解釋

形式

(一)文字、語法

○ヲ　原字乎の草體の變じたものともいひ、又、汗の省略變化したものだともいふ。發音は唇音である。筆順——一一ノ　結構——ヲ（第三畫を第一畫の肩より始めて、第二畫の端を通じて橫行する樣にかくべし）

○ゲ　原字、筆順、結構は前に說明してある。發音は舌本音である。

○ヲ　體詞に添はつて、他動の動作を受くるものを示す天爾乎波である。

(二)文章解剖

[主(省略)　客　テヲ　說　ヒイテアゲマス。(主語は省略されて、客語と說明語とよりなれる單文である)。

教法

(一)掛畫を提出して、前時の復習(內容の問答)。

(二)掛圖を觀察せしめて、姉は妹の手を如何にしてゐるかを問

答して、內容の談話を練習す。

(三)姉は妹に何と云ひしかと問ひ、「テヲヒイテアゲマスの言語を練習せしむ。

(四)「ヲ」「ゲ」の文字の書方を授け、發音を練習して、「テヲヒイテアゲマス」と綴らしめ、讀方、書方を練習す。

(五)左の問答により文章を解剖して、語句の關係を知らしむ。

(1) アゲマス に枠をかけて、如何してあげるのか。

(2) ヒイテ に枠をかけて、何を「ヒイテアゲマス」といつたのか。

(3) テヲ を如何にしてあげるといつたのか。

(4) 誰れがいつたのか。(「ワタクシガ」「ネイサンガ」の主語の省略されたることを授く。

(六)教科書を開かしめて、前時の分と共に讀方を練習せしむ。

(七)「ヲ」及び「ゲ」の音を有する事物、又は、言語をいはしめて、發音を練習し、已授文字のみよりなれるものは書取らしむ。

(八)五十音圖表を提出して、「ヲ」「ゲ」の文字を記入し、既授の文字と共に、讀方を練習せしむ。

(九)左の文を讀解せしめて(客語を有する文章を了解せしむ)練習せしむ。

(1) ジョカイテアゲマス。 (2) クルマヲヒイテアゲマス。

(十)本を離れて全頁の讀方を練習せしむ。

第二十三頁

(二時間)

要旨

「ユリ」の概念を與へ、「ユリノハナガサキマシタ」。「キレイデゴザイマス」の言語、讀方、書方、綴方等を授け、「ユ」「レ」「ザ」等の發音及文字の書方を授くるのが主眼である。そして、主語、說明語、修飾語、補語を有する單文の形を知らしめねばならぬ。

區分

第一時　ユリノハナガサキマシタ。
第二時　キレイデゴザイマス。

第一時

教材　ユリノハナガサキマシタ。

要項

内容＝百合の形態、種類、效用。

形式＝「ユリノハナガサキマシタ」「キレイデゴザイマス」の言語、讀方、書方、綴方、「ユ」「レ」「ザ」の發音。

教具　教科書挿繪の廓大圖、及び、百合の實物。

教材解釋

内容

○**ユリ**　百合は山野に自生し、又は庭園に栽培せらるる植物である。その地下莖に生ずる肥大なる鱗片は葉の變形にして、食用に供す。花は帶黄赤色、若くは、白色にして、六片よりなれる花蓋を有し、美なるが故に翫賞用として栽培せらる。その種類に卷丹、山百合、山丹、鹿子百合、鐵砲百合、竹島百合などがある。

形式

(一)文字語法

○**ユ**　原字勇の省略變化したるものである。發音は舌上音である。筆順―フ

一　結構―ユ　筆力を弛めてはねてはならぬ。そしてコの字と誤らざる樣に注意すべし。

○**サキマシタ**　の「マシタ」は崇敬態の助動詞「マシ」が、他の助動詞「タ」に續き、過去時を現はしたものである。

(二)文章解剖

主修　ユリノハナガ　主
説　サキマシタ。（單文）

教法

(一)掛圖及び「ユリ」を提出して、百合の形態、種類、效用等につき、簡單なる內容上の問答をなし、既有觀念の整理補充をなす。

(二)「ユリ」の言語を練習し、これを音に分解し、「ユ」の發音を練習せしむ。

(三)「ユ」の文字の書方を授け、「リ」の文字の書方を復習して、「ユリ」と綴らしむ。

(四)百合の花を示して、これは何か。何の花かを問ひ、「ユリノハナ」の言語を練習し、「ユリノハナ」と綴らしむ。

(五)百合の花が、どうなりましたかを問ひ、「サキマシタ」と言語の練習をなして、「ユリノハナガサキマシタ」と綴らしめて、讀方、書方を練習せしむ。

(六)左の問答をなして、形式上の吟味をなし語句の關係を知らしむ。

(1)「サキマシタ」に枠をかけて、何がさきましたか、

(2)「ハナガ」に枠をかけて、何の花がさきましたか。

(3)「ユリノ」に枠をかけて、百合の何が、咲きましたか。

(七)教科書を開かしめて、讀方を練習せしむ。

(八)「ユ」の音を有する事物名を擧げしめ、その發音を練習し、既授文字のみよりなれるものは書取らしむ。

ユミ、ツユ、フユ、ユキ、ユメ、アユ、ユカタ。

(九)已授の事物に「マシタ」を附して言語の練習をなさしむ。

コマガデキマシタ。タコガデキマシタ。モモノハナガサキマシタ。

ウメノハナガサキマシタ。サクラノハナガサキマシタ。

(十)五十音圖表を提出して、「ユ」の字を記入し、已授文字と共に讀方を練習せしむ。

第二時

教材　キレイデゴザイマス。

要項

內容＝前時の復習。

形式＝「キレイデゴザイマス」の言語、讀方、書方、綴方及び「レ」「ザ」の發音。

教具　仝前。

教材解釋

形式

(一) 文字、語法

○レ　原字禮の省略されたものである。發音は舌頭音である。結構―レ（ルの第二畫と同樣にかくべし。）

○ザ　原字、筆順、結構、發音等は前に說明してある。

○キレイデ　の「デ」は形容動詞の敬語「でせ話用」である。

○ゴザイマス　は助動詞の現在繼續時の終止法である。

(二) 文章解剖

（省略）主　補　說
キレイデ　ゴザイマス。（主語の省略された單文である。）

教法

(一) 掛圖を提出して、前時の復習（內容及び形式上の問答）

(二) 百合の花が咲いてゐるのを見た時の感想を言はしむ、

(三) 「キレイデゴザイマス」の言語を練習し、これを音に分解して、「レ」「ザ」の發音を練習せしむ。

(四) 「キ」「イ」「デ」「ゴ」「マ」「ス」などの文字の書方を復習して、「レ」「ザ」の文字の書方を授け、「キレイデゴザイマス」と綴らしめて、讀方、書方を練習せしむ。

(五) 左の問答によりて語句の關係、及び意味を了解せしむ。

(1)「ゴザイマス」とはどんなことか。

「キレイデゴザイマス」の「ゴザイマス」は、「きれいだ」「きれいです」「きれいでありません」「きれいでございます」などの階級的詞の中最も丁寧なる詞であるから互に比較して授ねばならぬ。「レ」の音は「デ」音と混じ易しけれども注意して授けねばならぬ。

(2)どんなにあるといふことか。
(3)何が「キレイデゴザイマスカ」。
(4)「ユリノハナガ」の主語が省略されたることに注意せしめて說明す。

(六)教科書を開かしめて、前時の分と共に讀方を練習せしむ。

(七)「レ」「ザ」の音を有する事物名を擧げしめ發音を練習し、已授の文字のみよりなれるものはかきとらしむ。

レンコン、レイ、ヒレ、アレイ、ノレン。サザエ、ザシキ、ザル、ヒザ。

(八)五十音圖表を提出して、「レ」「ザ」の文字を記入して、已授文字と共に讀ましむ。

第二十四頁　(二時間)

要旨　母鷄が雛鳥を愛育する狀態を知らしめ、主語、說明語、修飾語(副詞)を有する單文を授け、ココ、ピヨピヨの修辭法、及び「ド」「ヨ」「ヒ」の發音を練習すると共に、全文の言語、讀方、書方、綴方等を授くるのが主眼である。

區分
第一時　オヤドリガコココトヨンデヰマス。
第二時　ヒヨコガピヨピヨトナイテヰマス。

第一時

教材　オヤドリガコココトヨンデヰマス。

要項
內容＝鷄の雛を育つる有樣。
形式＝「オヤドリガコココトヨンデヰマス」の言語、讀方、書方、綴方、及び「ド」「ヨ」の發音。ココココの修辭法。

教具　教科書挿繪の廓大圖。

教材解釋

内容

○雌鶏が　雛を育つる有様は、甚だ親切なるもので、殆どその身を忘るるばかりである。即ち、雌鶏は、卵を生み、(通例十個内外)これを孵化せんがため抱卵し、凡三週間にして孵化す。雛は、直に歩行して、食を索む。親鶏は、雛の生長するまで、これを離さず、常にココココと鳴いつて、餌をあさり、敵の來るあれば、身を忘れて、これと戰ひ、夜は、その羽翼の下に入れて、暖むるなど愛育至つて丁寧である。

形式

(一)文字、語法

○ヨ　原字與の旁である。發音は舌上音である。筆順―フ一一　結構―㐌

この間架を同じくすべし。第三畫の末が餘り出ないように注意すべし。

○ド　原字、筆順、結構、發音共前に説明したり。

○ト　指定の意を示す天爾乎波であるが、他に變轉化成の意を示したり、動作狀態の相對を示したり、事物を並列する意を示したり、假定の意を云したり、已定の事柄を假定に言ふ意を示したり、一の事柄が他の事柄と背反する意を示したりする場合が多いけれども、この場合は、指定の意を示してゐるのである。

○ヨンデ　「デ」は四段活用の動詞「は行」の連用法「ビ」に續いて、撥音便となつたのである。

(二)文章解剖

主　オヤトリガ　副　ココココト　説　ヨンデヰマス。

(三)修辭法

○ココココ　母鶏が雛を呼ふ聲を形容したので、修辭法上これを聲喩法と云ふのである。聲喩法は、唯一心に、事物に心を奪はれたる刹那、覺えず知らず對境の音を我が聲にて模することから起つたので、これを附加すると、其の事物を一層活現的にならしむるのである。

教法

(一)掛圖を提出して、母鶏の産卵、抱卵、孵化、育雛の狀態につき、簡單なる問答をなし、既有觀念の整理補充をなす。

(二)「オヤドリ」なる言語を練習し、これを音に分解して、「ド」の發音及書方を教へ、且つ「オヤドリ」と綴らしむ。

(三)親鳥が、どうしてゐるかを問ひ、「ヨンデキマス」の言語を練習し、「ヨ」の發音、及、文字の書方を授け、「ヨンデキマス」と綴らしむ。

(四)親鳥は何と呼んでゐるかを問ひ、「ココニコト」と綴らしむ。

(五)「オヤドリガココニコトヨンデキマス」と綴らしめ、讀方、言語、書方の練習をなす。

(六)文章を解剖して、左の問答をなし語句の關係を吟味す。

(1)「キマス」に枠をかけて、どうしてゐるか。

(2)「ヨンデキマス」に枠をかけて、何が、呼んでゐるか。

(3)「オヤドリ」に枠をかけて、何と呼んでゐるか。

(4)「ココニコ」といふは何のことか(聲喩法の説明をなす)

(七)教科書を開かしめて、讀方を練習せしむ。

(八)「ド」及び「ヨ」の音を有する事物名を擧げしめて、發音を練習せしむ。

ドヒン、ドンス、コドモ、マド、ノド、キド、キド、カマド、ドテ。

ヨシ、ヨル、ヨロヒ、ヨモギ、ヨアケ。

(九)五十音圖表を提出して、「ド」「ヨ」の文字を記入し、已授文字と共に讀方を練習せしむ。

(十)聲喩法の練習として左の文を讀ましむ。

(1)カラスハカアカアトナイテキマス。

(2)ヲンドリガコケツコウトナイテキマス。

(3)カミナリガゴロゴロトナツテキマス。

挿繪を觀察せしむ。話方及び簡單なる綴方の練習をなすべし。

第二時

教材　ヒヨコガピヨピヨトナイテキマス。

要項

內容＝前時の復習。

形式＝「ヒヨコガピヨピヨトナイテヰマス」の言語、讀方、書方、綴方及び「ピ」の發音「ピヨピヨ」の修辭法。

教具　前に仝し。

教材解釋

形式

(一)文字

○**ピ**　原字、筆順、結構、前に説明してある。發音は唇音である。

(二)文章解剖

主　ヒヨコガ　副　ピヨピヨピヨト　説　ナイテヰマス。(單文)

(三)修辭法

○**ピヨピヨピヨ**　聲喩法である。

教法

(一)掛圖を提出して、前時の復習をなす。(內容、形式とも)

(二)掛圖を示して、母鷄が、雛を呼ぶと、「ヒヨコ」は、どうしてゐるかの問答をなし、「ヒヨコガ」「ナイテヰマス」を書き取らしむ。

(三)何とないて、ゐるかを問答して、「ピヨピヨピヨ」の言語「ピ」の發音を練習し、「ピ」の字の書方を授け、「ピヨピヨピヨト」綴らしむ。

(四)「ヒヨコガピヨピヨピヨトナイテヰマス」と綴らしめて、言語、讀方、書方を練習せしむ。そして、更に前時の如く解剖して、語句の關係を吟味す。

(五)教科書を開かしめて、前時の分と共に、讀方を練習す。

(六)「ピ」の音を含める事物名を擧げしめて、發音を練習し、已授文字のみよりなれるものは書き取らしむ。

(七)五十音圖表を提出して「ピ」の文字を記入して、已授文字と共にその讀方を練習す。

(八)聲喩法の練習として事物の音を副詞としたる言語の練習

をなす。

第二十五頁　（三時間）

要旨

神社のことを叙したる口語、崇敬體の叙事的記事文であるから、敬神の觀念を養ふと共に、「モリ」「オミヤ」「トリヰ」「イシダン」等の語を授け、讀方、書方、綴方、及び「エ」「ダ」の發音を練習するのが主眼である。

區分

第一時　モリノナカニオミヤガアリマス。
第二時　アカイトリヰガミエマス。
第三時　タカイイシダンモミエマス。

第一時

教材　モリノナカニオミヤガアリマス。

要項

内容＝森。御宮。

形式＝「モリノナカ」「オミヤ」の言語、讀方、書方、綴方。

教具　教科書挿繪の廓大圖。

教材解釋

内容

○森　森は樹木の繁りて叢立ちたる所、即ち、神社等のある木立の處を森といふのである。

○宮　神を祀れる建物の名稱である。神は尊ばねばならぬものであるから、神社の壁を損したり、樂書をしたり、神苑の樹木を折り取りたりせぬ樣に訓戒せねばならぬ。

形式

(一)語法

○ニ　此の場合の「ニ」は、地位を示すに用ゐられたる天爾乎波である。悉しくは「タケニスズメ」の所を見よ。

○オミヤ　の「オ」は崇敬の意を表はす接頭語である。

(二)文章解剖

補	主	説
モリノナカニ	オミヤガ	アリマス(主語、説明語、補語を有する單文である)。

教法

(一)掛圖を提出して、森、神社、「トリヰ」、石壇等につき簡單なる問答をなし、既有觀念の整理補充をなす。

(二)「モリノナカニオミヤガアリマス」の言語及び發音練習。

(三)教師教材の文章を口唱して書取らしめ(二、三名は板上にかかしむ)板上訂正をなす。

(四)個讀、齊讀を行ひて、讀方を練習せしむ。

(五)文を解剖して、左の問答をなし語句の關係を知らしむ。

(1)「アリマス」に枠をかけて、何があるか。……オミヤガ(主)

(2)お宮が何處にあるか。……モリノナカニ(補)

(3)森のなかにお宮が、如何にして。……アリマス(説)

(六)教科書を開かしめ、讀方を練習せしむ。

(七)左の文章を讀ましめ、主語と説明語と補語との關係を吟味す。

(1)イケノナカニフネガアリマス。

(2)ハコノナカニタマゴガアリマス。

(3)フロシキノナカニホンガアリマス。

(4)カバンノナカニフデガアリマス。

(八)左の問答をなし、内容の復習をなさしめ、話方を練習す。

(1)森とはどんな所か。お宮はどんな所にあるか。

(2)お宮はどんな所ですか。お宮に對する心得は如何か。

第二時

教材　アカイトリヰガミエマス。

要項

内容＝「トリヰ」の形、色、材料。

形式＝「アカイトリヰガミエマス」の言語、讀方、書方、綴方、及び「エ」の發音。

教具　仝前。

教材解釋

内容

○**鳥居**　は、石、又は、木にて作る。二本の柱を立てて、その上に笠木を亘してあつて、多くは、屋根の設はないのである。神社の門と見做すべきもので、其の色は多くは赤に塗りてある。

形式

(一)文字、語法、假名遣

○**エ**　原字江の旁てある。發音するに、口の開き方は「ア」と「イ」との中間なれば、「エ」の音を發す。筆順―一ノ一　結構―エ　第一畫の長さは、第三畫の三分の二位の割にかくべし。中央の柱は左に向つて堅くかかねばならぬ。

○**ミエマス**　の「エ」は「ヱ」てないから、注意すべし。「トリヰ」の「ヰ」は「イ」でないから、假名遣に注意せねばならならない。

○**アカイ**　は形容詞の連體法てある。即ち「トリヰ」といふ體詞に連りてこれを修飾してゐるのてある。

(二)文章解剖

主修　アカイ　主　トリヰガ　説　ミエマス。(主語と、説明語と、主語の修飾語とを有する單文)

教法

(一)掛圖を提出して、前時の内容につき復習(問答)

(二)「トリヰ」を指さして問答をなし、已有觀念を整理し、言語の練習をなす。

「エ」の音は「イ」の音と混同し易ければ、その發音につきしかと充分注意して練習せしめねばならぬ。

(三)どんな「トリヰガ」見えるかと發問して、アカイトリヰガミエマス」といはしめて言語の練習をなし、これを音に分解して「エ」の發音を練習す。

(四)「エ」の文字の書方を授けて、「アカイトリヰガミエマス」と綴らしめて、讀方書方を練習す。

(五)左の問答を行ひ、語句の關係を吟味し、意味を了解せしむ。

(1)「ミエマス」に枠をかけて何が。……(トリヰガ)主語。

(2)「トリヰガ」に枠をかけてどんな「トリヰ」か。……(アカイ)主語修飾語。

(3)「アカイトリヰ」がどうですか。……(ミエマス)說明語。

(六)教科書を開かしめて、「エ」の文字を見出さしめ、全文の讀方を練習せしむ。

(七)「エ」の音を有する事物名を擧げしめて、「エ」の發音を練習し、已授文字のみよりなれるものは、これを書き取らしむ。

色の觀念を明かにすべし。

フエ、エビ、エンピツ、エダ、エリマキ。

(八)五十音圖表を提出して、「エ」の文字を記入し、已授文字と共に讀方を練習せしむ。

(九)左の文章を讀ましめて、主語の修飾されたる語句の練習をなす。

(1)アカイ　オミヤガ　ミエマス。　アカイ　ハナガ　ミエマス。

(2)クロイ　モンガ　ミエマス。　クロイ　ハコガ　ミエマス。

(3)シロイ　ハタガ　ミエマス。　シロイ　イヘガ　ミエマス。

(十)「トリヰ」の略畫をかかしめて、その名稱をかかしむ。

(十一)「オ」の接頭語を附すべき名詞を擧げしめ、前頁にある「オヤドリ」の「オ」との異同を比較す。

オテラ、オメシモノ、オハキモノ、オコドモ、オハオリ、オハカマ。

第三時

教材　タカイイシダンモミエマス。

要項

内容＝石壇。

形式＝「タカイイシダンモミエマス」の言語、讀方、書方、綴方及び、「ダ」の發音。複數を表はす天爾乎波「モ」の使用法。

教具　仝前。

教材解釋

内容

○**石段**　坂道の昇降に便なるために、切石にて、疊みたる階段である。

形式

(一)文字、語法

○**ダ**　原字、筆順、結構、發音等は前に説明したり。

○**モ**　「モ」は事物、動作、狀態などを並列するともあり、二語の間に這入りて語氣を強めることもあり、極く調子を輕くすることもあり、時に或は感嘆の意を含めて言ふこともあるが、此の場合は事物の並列即ち複數を意味するものである。

(二)文章解剖

主修　タカイ　イシダン　主

モ　ミエマス。　説

教法

(一)掛圖を提出して前時の復習(内容上の問答)

(二)石段を示して、その構造及び何の爲めに、作られたるかを問答し、已有觀念の整理補充をなす。

(三)「イシダン」の言語を練習し、これを音に分解して、「ダ」の發音、及び、文字の書方を授け、「イシダン」と綴らしむ。

(四)どんな石段が見えるかを問答し、「タカイイシダンガミエマス」と言語の練習をなしてこれを綴らしめ、讀方、書方を練習せしむ。

(五)「ミエル」ものは、何々かと問ひ、「トリヰモ」「イシダンモ」と答へしめて、「タカイイシダンモミエマス」と綴らしむ。

(六)前時に準じ、文を解剖して、語句の關係を吟味し意味を了解せしむ。特に「モ」の天爾乎波の用法に注意せしむ。

(七)教科書を開かしめて讀方を練習せしむ。

(八)「タ」の音を含める事物名を擧げしめて、その發音を練習す。

ダイコン、ダイナマイト、ダイク、エダ、クダ、ダイコク、ダンゴ、カンダンケイ。

(九)五十音圖表を提出して、「ダ」の文字を記入し、已授文字と共に讀方を練習す。

(十)「モ」の天爾乎波の使用法練習として左の文を讀ましむ。

イケノナカニフネモアリマス。　ヤマノウエニハタモミエマス。
タカイホバシラモミエマス。　タカイバタザヲモミエマス。
アカイハタモミエマス。　シロイハタモミエマス。

(十一)本頁の全文を讀ましめて概括し、讀方、及び本を離れて、言語の練習をなさしむ。

第二十六頁

(二時間)

要旨

「カタツムリ」の形態、習性を授け、「キノエダ」「カタツムリ」「デンデンムシムシ」「ツノダセ」「ヤリダセ」等の言語、及び、全文の讀方、書方、綴方を授くると共に、呼掛、獨立語のある命令文の形式を教へねばならぬ。

區分

第一時　キノエダニカタツムリガヰマス。
第二時　デンデンムシムシツノダセヤリダセ。

教材

第一時

キノエダニカタツムリガヰマス。

要項

內容＝「カタツムリ」の形態、習性。

形式＝「ム」の發音、及び、全文の言語、讀方、書方、綴方。

教具 蝸牛の實物、及び、掛圖。

教材解釋

內容

○カタツムリ 蝸牛は、卷貝の一種であつて、その體は、甚軟くて、伸縮自在である。體の伸びたる時は、其の一部は殼の外に現はる。前端には、頭があつて、角と、眼と、口とを備へてゐる。體の腹面は平にして粘液を分泌し、物の表面を匍匐するの用をなしてゐる。これが即ち足である。蝸牛は、陸上に住み雨濕のときには樹上に上り新芽を食し、晴天の日には植物の葉の裏面に隱る。敵に會すれば、その體縮みて、殼の中に隱る。故に、若し樹の枝にある時、これに觸るれば、直に地上に落下す。春の末より、秋の末までの間に出現し、冬に至れば、木や、石垣の穴の中に潛伏して越年する。

豫めカタツムリの形態、習性を觀察し、且その實物を持來らしむべし。

形式

(一)文字

○ム 原字牟の省略である、角形によりて授くべし。 發音は鼻音である。筆順―ム、 結構―△ 三

(二)文章解剖

副 キノエダニ　主 カタツムリガ　説 ヰマス。

教法

(一)「カタツムリ」の實物、及び、掛圖を提出して、形態、生活狀態を左の各項につき問答し、已有觀念の整理補充をなす。

(1)蝸牛の形は如何。(2)蝸牛の住む所は如何。(3)蝸牛は何を食するか。(4)如何にして歩行するか。

(二)「カタツムリ」の言語を練習し、これを音に分解して、「ム」の發音を練習す。

(三)「カ」「タ」「ツ」「ム」「リ」等の文字の書方を復習し、「ム」の文字の書方を授けて「カタツムリ」と綴らしむ。

(四)掛圖を觀察せしめ「カタツムリ」がどこにゐるかを問答し、「キノエダニ」と言語の練習をなして綴らしむ。

(五)「キノエダニカタツムリガキマス」と綴らしめ、讀方、書方、言語を練習す。

(六)文を解剖して、主語と説明語と副詞との關係を吟味して、其の意義を了解せしむ。

(七)「ム」の音を有する事物名を擧げしめ、發音を練習し、已授文字のみよりなれるものは、これを書き取らしむ。

(八)五十音圖を提出して、「ム」の字を記入し、已授文字と共に、讀方を練習せしむ。

(九)教科書を開かしめ、「ム」の字を見出さしめて、讀方の練習。

(十)「カタツムリ」の略畫をかかしめて、名稱をかかしむ、

第二時

教材　デンデンムシムシツノダセヤリダセ。

要項

内容＝前時の復習。

形式＝「デンデンムシムシ」「ツノダセ」「ヤリダセ」の言語、讀方、書方、綴方。

教具　前時に仝じ。

教材解釋

形式

(一)語法

○**ダセ**　四段活用の動詞出すの命令法である。

此の文は東京の童謡。

○デンデンムシ　は「カタツムリ」の別名で「ムシムシ」は、意味を強くするために、同じ辭を重ねたので、これを修辭上、重言法と云ふのである。

(二)文章解剖

呼掛獨立語	説明部	説明部
デンデンムシムシ	ツノダセ	ヤリダセ。

「ヤリダセ」は、「ヤリ」の如き「ツノ」をだせとの意。

練習

ミナサン
ミナサンデス
ミナサンデスカ
ミナサンデスカ
ポチ
ポチデス
ポチデスカ
ポチデスカ
アシダセ
アシダセ

教法

(一)掛圖を提示して、前時の內容上の復習。(問答)

(二)教材の文を口唱して、聽寫せしむ(二、三名は板上にかかしむ)。

(三)板上訂正を行ひ、個讀、齊讀せしめて讀方を練習す。

(四)文章を解剖し、語句の關係を問答して、其の意義を了解せしむ。

(五)讀本を開かしめ、前時の分と共に讀方を練習せしむ。

第二十七頁　(二時間)

要旨文體

姉と兄との動作を叙したる崇敬體の叙事文である。これを授くるには、繪を見たり字をかいたりする時の姿勢、注意、用具の取扱に關する心得、並に、兄弟睦まじく勤勉すべきことを教ふると共に、「ェ」、「ジ」の發音、及び、全文の讀方、書方、綴方等を授くるのが主眼である。

區分

第一時　ネエサンガエヲミテキマス。
第二時　ニイサンガジヲカイテキマス。

教材

第一時

ネエサンガエヲミテキマス。

要項

内容＝弟が姉の動作を見て話したこと。

形式＝「ネエサン」「エ」の發音、及び、全文の讀方、書方、綴方。

教具　掛圖。

教材解釋

形式

(一)文字、及語句

○**エ**　慧の俗字慧の省略されたるものである。發音、口の開き方「ア」と「イ」との中間にあれば「エ」の音を發す。筆順――フ　一　結構――エ　第一、第二畫は「ア」と同一であるけれども第二畫を「ア」の如く彎曲せしめてはならぬ。

○**ニイサンネエサン**　の「サン」は尊敬の意味を示す接尾語である。

(二)文章解剖

主　客　説

ネエサンガ　エヲ　ミテヰマス(單文)。

教法

小さい弟が行儀よく兄姉の勉強を見てゐてそこの邪魔にならない樣にしてゐる點に注意せしめ人の作業を妨害するさまを戒すべしとかを訓べし。

(一)掛圖を提示して、三人の子供の動作につき問答し、繪を見たり、字を書いたりする時の注意、心得を教ふ。

(二)「ネエサン」が何をしてゐるかを問ひ、「ネエサンガエヲミテヰマス」と言はしめて言語を練習し、「ネエサンガミテヰマス」と綴らしむ。

(三)「ネエサン」が、何を見てゐるかを問ひ、「エヲ」と言はしめて、「エ」の發音を練習し、「エ」の文字の書方を授け、「エヲ」と綴らしむ。

(四)更に「ネエサン」が何をしてゐるかを問ひ、「ネエサンガエヲミテヰマス」と言はしめて、綴らしめ、言語、及び、讀方、書方を練習す。

(五)文章を解剖して、語句の關係を吟味す。

(1)「ミテヰマス」に枠をかけて、誰れがみてゐるか。

(2)何をみてゐるか。

(3)「ネエサン」は何を如何にしてゐるか。

(4)「ネエサンガエヲミテキマス」と言はしめ、その關係を充分に了解せしむ。

(六)教科書を開かしめて讀方を練習す。

(七)「エ」の音を有する事物名を擧げしめて、發音を練習す。

(八)五十音圖を提示して、「エ」の文字を記入し、已授文字と共に讀方を練習す。

(九)左の文章を書取らしむ。

オトウサンガ、シンブンヲ　ミテキマス。　オカアサンガ　エヲ　ミテキマス。

センセイガ　ハナヲ　ミテキマス。　オヂイサンガ　ジヲ　ミテキマス。

(十)左の文を提示して、○點の處に塡字せしむ。

ネエサン㋐エ㋒　ミテ○○○。

㋔㋓㋖㋐㋓エヲ　㋙㋒キマス。

第二時

教材　ニイサンガジヲカイテキマス。

要項

内容＝「ニイサン」。「ジ」。

形式＝「ニイサン」「ジ」の發音、及び、全文の讀方、書方、綴方、

教具　全前。

教材解釋

形式

(一)文字

○ジ　原字、筆順、結構は前に説明してある。發音は舌頭舌上音である。

(二)文章解剖

主　ニイサンガ　客　ジヲ　説　カイテキマス。(單文)

教法

(一)掛圖を提示して、前時の復習。(内容形式共)

(二)「ニイサン」「ジ」の言語、發音、文字の書方等を授けて、「ニイサンガ ジヲカイテキマス」と綴らしめ、言語、及び、讀方、書方を練習す。

(三)前時と仝樣に文を解剖して主語、客語、說明語の關係を問答し意義を了解せしむ。

(四)教科書を開かしめ、前時の教材と共に讀方を練習せしむ。

(五)「ジ」の音を有する事物名を擧げしめて、「ジ」の發音を練習し、已授文字のみよりなれるものは書き取らしむ。

(六)五十音圖に「ジ」の文字を記入し、已授文字と共に讀方を練習す。

(七)左の文章を讀解せしめて、語句の關係を吟味す。

ニイサンガ　エヲ　ミテキマス。　ネエサンガ　ジ　ヲカイテキマス。

(八)繪本を見たり、文字を書いたりする時の姿勢、心得などを問答し、此の兄と姉とは、どんな子供であると思ふか、又、如何なる間柄の子供なりと思ふか等の問答をなす。

練習

オテガハ
ナキヤサ
ヲジヲカ
ヲマスイ
ルホキマ
ツヲテス
ガキガン

第二十八頁　(二時間)

要旨

兵隊と軍旗のことを叙したる崇敬體の叙事文である。これ等の事項を授くると共に、「ヘ」「グ」の發音、及び「ァノ」「ァレ」の代名詞の用法を授け、全文の讀方、書方、綴方を練習するのが主眼である。

區分

第一時　ヘイタイガ　ナランデ　キマス。

第二時　アノハタヲゴランナサイ。　アレガグンキデス。

第一時

教材

ヘイタイガナランデキマス。

要項

内容＝兵隊に關する事項。

形式＝「ヘイタイガナランデキマス」の讀方、書方「へ」の發音。

教具　掛圖

教材解釋

内容

○**ヘイタイ**　兵隊といふ語は、嚴密に云へば、一兵卒を指すにあらずして、數人の隊を組みたるものを云ふのであるけれども通俗には、一兵卒を指して兵隊と云ふこともある。軍人は國家を保護する大切の役目を以てゐるものであるから、必ずこれを尊敬せねばならぬ。そして兵役に服するは國民たるものの大切なる義務であるから、吾等は喜んで、この名譽ある義務に服せねばならぬ。兵隊の中には兵卒と將校とがゐる。兵卒には二等卒、一等卒、上等兵、伍長、曹長などの階級がある。そして、これ等の兵卒を指揮するのは將校である。又兵隊には歩、騎、砲、工、輜重、看護の種類がある。本課の場合は歩兵の行軍してゐる所であつて、「ランドセル」を負ひ、劍を帶び、銃を荷ひ居ることを主として教授せねばならぬ。

形式

(一)文字、語法

○**へ**　皿の草或は反の省略されたるものともいふ。發音は喉音である。結構

―**へ**　折點下へ百二十度位の角を作る心持にてかくべし。

○**ナランデ**　助動詞「デ」が四段活用動詞の「ハ」行の連用法「ヒ」に續いて「ビ」が撥音便「ン」となつたのである。

○**キマス**　「キ」といふ動詞に、崇敬の助動詞「マス」の添はりて現在時を表はしたものである。

(二)文章解剖

主　ヘイタイガ　副　ナランデ　説　キマス。(單文)

教法

(一)掛圖を提出して、兵隊の必要、武裝、任務、階級、軍隊生活の有樣等につき既有觀念の整理補充をなす。

(二)「ヘイタイ」の言語を練習し、これを音に分解して、「へ」の發音を練習せしめ、「へ」の文字の書方を授け「ヘイタイ」と綴らしむ、

(三)「ヘイタイ」が如何にして來るかを問ひ、「ヘイタイ」が「ナランデキマス」と言はしめ、言語の練習をなして、綴方、讀方、書方を練習せしむ。

(四)左の問答をなして形式上に於て主要なる語句の關係を知らしむ。

(1)「キマス」に枠をかけて何か來るか。

(2)「ヘイタイ」に枠をかけて如何にして來るか。

(3)何がならんで來るか。

(五)「ヘ」の音を有する事物名を擧げしめて、「ヘ」の發音練習をなし、已授文字のみよりなれるものはこれを書取らしむ。

(六)五十音圖に「ヘ」の字を記入し、既授文字と共に讀方を練習せしむ。

(七)左の文章を口唱して、書取らしめ、語句の關係を吟味す。(練習)。

(1)セイトガ　ナランデキマス。

(2)キヘイガ　ナランデキマス。

(3)ホヘイガ　ナランデキマス。

(4)クルマガ　ナランデキマス。

(八)教科書を開かしめて讀方を練習せしむ。

第二時

教材　アノハタヲ　ゴランナサイ。　アレガ　グンキデス。

要項

内容＝軍旗は、軍隊の精神なること。

形式＝「アノ」「アレ」の代名詞、「グ」の發音及び全文の讀方、書方、綴方。

教具　軍旗の掛圖。

教材解釋

内容

○軍旗　本課の軍旗は、聯隊旗を指したのであるが、此の聯隊旗は、大元帥陛下が親ら下し賜ふものなれば、兵隊は、これを陸軍の生命として、死を以て守らねばならぬ。故に、吾々は、此の聯隊旗に對しては敬禮をせねばならぬ。

形式

(一)文字語法

○グ　原字、筆順、結構、發音は前に説明してある。

○アノ　「アレ」は自分に最遠い關係にある事物や地位や方向を指示する代名詞である。

○デス　は「デアリマス」の約まつた語であつて、指定の意を表はす助動詞の終止法である。

(二)文章解剖

(1)　主修　アノ　客　ハタヲ　客　ゴランナサイ。(單文命令文)

(2)　主　アレガ　説　グンキデス。(單文平叙文)

教法

(一)掛圖を提示して前時の復習をなす。

(二)掛圖を示して軍旗につき内容上の問答をなして、軍旗の大切なることを知らしむ。

(三)「グンキ」の言語を練習し、これを音に分解して「グ」の發音を練習し、「グ」の文字の書方を授け、「グンキ」と綴らしむ。

(四)教材を口唱して聽寫せしむ。(二、三名は板上にかかしむ)。

(五)板上訂正を行ひ個讀又は齊讀によりて讀方を練習せしむ。

(六)文章を解剖して、語句の關係を吟味し、特に「アノ」「アレ」の代名詞につきその使用法を練習す。

(1)「ゴランナサイ」に枠をかけて何をごらんなさいといふのか。

(2)「ハタヲ」に枠をかけてどの「ハタ」のことか。

(3)「アノハタ」とはどのことか。「アノ」とは何を指したるものか。自分の

位置よりすれば、何れにあるか。

(4)「グンキデス」に枠をかけて、どれが軍旗であるといふのか。

(5)「アレ」とはどういふことか。自分の位置と比較して如何。

(七)教科書につき、前時の分と共に全文の讀方を練習せしむ。

(八)左の文章を讀解せしめて、「アノ」「アレ」の用法を練習せしむ。

(1) アノ　ヒトヲ　ゴランナサイ。　アレガ　センセイデス。

(2) アノ　ハタヲ　ゴランナサイ。　アレガ　ヒノマルノハタデス。

(3) アノ　ミセヲ　ゴランナサイ。　アレガ　ゴフクヤデス。

(九)「グ」の音を有する事物名を擧げしめて、發音を練習し、已授文字のみよりなれるものは書取らしむ。

(十)五十音圖に「グ」の文字を記入し讀方を練習せしむ。

(十一)軍旗に遇ひたる時の感想をいはしめて、話方の練習をなさしむ。

本課は、これを二時間に區分して教授するも可ならん。

第二十九頁　(二時間)

要旨

風車、水車の回轉する有樣を叙したる簡單なる七五調の韻文である。風車、水車に關する事項の大要を授くると共に、「ゼ」「ヅ」の發音、及び、全文の讀方、書方、綴方を授け、韻文の形式を教ふるが主眼である。

區分

第一時　カゼニクルクルカザグルマ。

第二時　ミヅニグルグルミヅグルマ。

教材

第一時

カゼニクルクルカザグルマ。ミヅニグルグルミヅグルマ。(主として內容)

要項

內容＝風車。　水車。

形式＝「カ　ゼ」「ミ　ッ」「ク　ル　ク　ル」「グ　ル　グ　ル」「カ　ザ　グ　ル　マ」「ミ　ヅ　グ　ル　マ」等の讀方、書方、綴方、及び「ゼ」の發音。

教具　風車、水車の掛圖。

教材解釋

內容

○**カザグルマ**　風車は輪の周圍に翅が澤山あつて、それが風のために廻轉されるのである。日本に於ては、紙を折りて造りたる玩具用の風車のみある。けれども歐洲各國にては木及び金屬板を用ひて大仕掛の風車を作り、その力を以て種々の仕事を助けしむること我國の水車に異ならずといふ。

○**ミヅグルマ**　水車は水の力にて、廻轉する仕掛てある。高所から水を落さしめて、車を廻轉せしむるもの、或は水の流過する力を利用したるもの等がある。本圖の水車は高所より水を落して、廻轉せしむる仕掛てある。

○水車及び風車の歌。

ミヅグルマ、ミヅノマニマニメグルナリ、ヤマズメグルモヤマズメグルモ。
カザグルマ、カゼノマニマニメグルナリ、ヤマズメグルモヤマズメグルモ。

（小學唱歌集）

カザグルマ、カゼノマニマニヨクメグレ、カゼノチカラノアルカギリアルカギリ、
ミヅグルマ、ミヅノマニマニヨクメグレ、ミヅノチカラノアルカギリアルカギリ。

（小學唱歌集）

形式

(一)文字語法

○**ゼ**　原字、筆順、結構、發音等は前に說明してある。

○**ヅ**　原字、筆順、結構、發音は前に說明してある。

○**クルクル、グルグル**　は何れも狀態に關する副詞である。「クルクル」は廻はるのが輕く聞え「グルグル」は、重く聞ゆ。

(二)文章解剖

補　副詞　主　説省
カゼニ　クルクル　カザグル・マ　（七五調の韻文である）
補　副詞　主　説省
ミヅニ　グルグル　ミヅグルマ　（同じ）

(三)修辭法

○クルクル、グルグル　は車の廻轉する狀態を形容したるもので、修辭法上、これを擬體法と云ふのである。擬體法によりて、車の廻轉する有樣が活現せらるのである。各節の末尾に「クルマ」とあるは、「マ」の音を脚韻としたので、これによりて、諷誦の際一種面白き調子がするのである。

教法

(一)掛圖及び「カザグルマ」を提示して、風車及び水車の原料、構造、用途等につき簡單なる內容上の問答をなして、已有觀念の整理補充をなす。

(二)教科書を開かしめて、讀方を練習せしむ。

(三)「カザグルマガカゼニクルクルマハル」。「ミヅクルマガミヅニグルグルマハル」といふ意味を說明して、內容の精究をなす。

(四)風車及び水車の廻轉するのを見たる時の感想を云はしめて、話方の練習をなさしむ。

(五)「カザグルマ」「ミヅグルマ」の讀方、書方を教授す。

第二時

教法

(一)前時の復習(內容上の問答)をなす。

(二)「カゼ」「ミヅ」の讀方、書方を授く。

(三)教師全文を口唱して書取らしめ、板上訂正を行ひ、讀方、書方を練習す。

(四)文章を解剖して語句の關係を問答し、散文に書き直して意

義を了解せしむ。

(1)「カザグルマ」に枠をかけて、風車がどうするといふことか。

(2)「クルクル」に枠をかけて、何の爲めに「クルクル」廻るのか。

(3)「マハル」といふ説明語の省略されたることを知らしむ。

(4)「ミヅグルマ」につきても同上の問答をなして、その關係を了解せしむ。

(五)諷誦せしめたる後、本課の全體を諳寫せしむ。

(六)「ゼ」「グ」の音を有する事物名を擧げしめ、發音の練習をなす。

已授文字のみよりなれる語はこれを書き取らしむ。

(七)五十音圖に「グ」「ゼ」の文字を記入し、已授文字と共にその讀方を練習す、

(八)教科書につき達讀練習をなさしむ。

(九)譜にて、歌はしむ。

第三十頁及び三十一頁（四時間）

要旨

牛若丸と辨慶との史的事蹟を描きたる崇敬體の叙事文である。牛若丸、辨慶の事蹟を知らしむると共に、全文の讀方、書方、綴方を授け「ベ」「ヲ」の發音、接讀詞「ソレカラ」の用法を練習せしめ、勇壯の士氣を涵養するのが主眼である。

區分

第一時　牛若丸と辨慶の話。

第二時　ベンケイガウシワカマルニマケマシタ。

第三時　ソレカラ　ケライニナリマシタ。

第四時　フエ。　カタナ。　ナギナタ。　アシダ。　ランカン。

第一時

教材

牛若丸と辨慶と仕合して辨慶牛若丸にまけて、その臣となりしこと。

要項

内容＝牛若丸の幼時及び人となり辨慶との關係。

教具

教科書挿繪の廓大圖。

教材解釋

内容

○今から七百年ばかり前に、九郎判官、源義經といふ名高い軍の大將がありました。この義經は、幼少の時は、名を牛若丸といひました。牛若丸は四つの時から他所の宅に預けられ、七つの時には僧の弟子として鞍馬の山寺に上がりました。そこで牛若丸は、十五の年まで鞍馬山にゐて、晝は學問を勉強し、夜は、山奥の僧正が谷といふ所にいつて、一心にけんじゆつの稽古をはげみましたので、中々の名人となりました。

それから牛若丸は京都へ參りまして、常に平氏の樣子を窺つてゐました。或晩のことでありました。牛若丸は例の通り都の樣子を窺はんとて、笛を吹きながら、五條の橋の上を通ると、待てッ」と呼びとめるものがあるので、ふりかへつて見ると、身の長一丈もあらんと思はるゝ大坊主が、手に、薙刀を持つて、衝立ち、「御腰なる黄金の太刀直に渡せ。我は少し、心に願ひがあつて、この橋の上で、千本の太刀を貰ひ受けてゐるものであるが、今宵一本集むればそれで、願ひが屆く譯だ、イザ渡せ。渡さねば、可憐さうだが、此の薙刀の錆にして、しまはねばならぬ」と大の目を開いて申します。

牛若丸は「カラカラ」と打ち笑ひながら、「これは、無禮極まる法師かな、近頃世に、喧しき、太刀取とは、お前のことであつたか、寄りて取らば與へもしよう」と云ひますと、法師は怒つて「それならば斯うして、奪つて見せる」と薙刀を水車の樣に振り廻はして、斬つて掛つた。

牛若丸は、少しも恐れず、刀も拔かずに、只ヒラリヒラリと身をかはし、さながら、胡蝶の舞ふが樣に充分に弄びましたので、何うしても討つことは出來ませんから、

とても及ばぬことを悟り、薙刀をうち捨てゝ、恐れ入りましたお腕前、若や貴方は牛若丸様ではありませんか、私は、武藏坊辨慶であります。千人の太刀を取ると稱して、こんなに、亂暴するのも、何うかして、源氏の若様にめぐりあいたいためでした。何うか惡しからず、思召して、これから貴君の臣にして下さいませと、平にあやまりました。

牛若丸は「如何にも俺は牛若丸だ、汝がそんな考ならこれから俺が、臣にしてやらう、忠義を盡してくれ」といつて、此處で臣にしてやりました。

それから辨慶は牛若丸の忠臣として、常に義經を助けて大變な手柄を立てました。

○辨慶の唱歌。

歌四編旗　士

天下の名品に逢はばやと、夜な〳〵五條の橋に出て、九百九十九本目の太刀は源家の薄綠『黑革縅に袈裟頭巾、薙刀杖に仁王立ち、七つ道具を背負しに智謀の多きぞ知られける』。うち振る兵器は八角棒、三十二個の鐵の疣、阿修羅と見ゆる勇僧は、西塔別當武藏坊『。君に忠義のみこし路や、安宅の關をうち過ぎて、末の世までも清き名を、洗ひ流して衣川『。

罪を謝するものは宥しやらねばならぬといふことを注意して教へねばならぬ。

教法

(一)掛圖を提出して目的の指示をなす。

(二)掛圖につき左の各項を順次說話す。

(1)牛若丸の幼時。(2)鞍馬山に於ける修業の有樣。(3)五條橋上に於ける辨慶との仕合。(4)義經の人となり。(5)辨慶の忠義。

(三)談話の要項を復演せしめて話方を練習せしむ。

(四)牛若丸と辨慶との話を聞いたる感想を話さしむ。

(五)教科書の繪畫を觀察せしめ、且つ讀本の文章を讀みて聞かしむ。

教材

ベンケイガ　ウシワカマルニ　マケマシタ。

第二時

要項

内容＝前時の復習。

形式＝「ベンケイ」「ウシワカマル」「マケマシタ」等の言語、全文の讀方、書方、綴方、及び、「ベ」「ワ」の發音。

教具

仝前。

教材解釋

形式

(一)文字

○ベ　原字、筆順、結構は前に説明してある。發音は唇音である。

○ワ　原字和の草わの變成である。筆順―ワ―フ　構―ワ（口の第一畫とフの字になるクとならざる樣）

にかくべし。發音は唇音である。

(二)文章解剖

主　ベンケイガ

補　ウシワカマルニ

説　マケマシタ。（單文）

教法

(一)掛圖を提出して、前時の内容を復習す（問答）。

(二)復習をなしつゝ、「ベンケイ」「ウシワカマル」の言語を練習し、これを音に分解して、「ベ」「ワ」の發音を練習せしめ、文字の書方を授けて綴らしむ。

(三)全文を口唱して、聽寫せしむ（一、二名は板上にかかしむ）。

(四)板上訂正をなし、個讀、齊讀をなさしめて、讀方を練習す。

(五)文を解剖して、主語と説明語と補語との關係を吟味して、意義を了解せしむ。

(六)「ベ」「ワ」の字を有する事物の名稱を擧げしめて、發音を練習し、已授文字のみよりなれるものは書き取らしむ。

(七)五十音圖に、「ベ」「ワ」の文字を記入し、已授文字と共に、讀方を練習せしむ。

(八)左の文章の讀解練習をなさしむ。

・イヌガ　ネコニ　マケマシタ。ヘイシガ　ゲンジニ　マケマシタ。

ニイサンガ　オトウトニ　マケマシタ。

(九)讀本を開かしめて、達讀練習をなさしむ。

第三時

教材　ソレカラ　ケライニ　ナリマシタ

要項

内容＝前時の復習。

形式＝接續詞「ソレカラ」の用法、「ケライ」の言語、及び、全文の讀方、書方、綴方。

教具　仝前。

教材解釋

形式

(一)語法

○**ソレカラ**　の「ソレ」は、指示代名詞であつて、此處には、辨慶が、牛若丸に負けたることを指したのである。「カラ」は、事物、事件の起點を説明する接續詞で、文語の「より」と同意味である。

(二)文章解剖

主、省略	接(副)	補修	補	説
	ソレカラ	ケライニ	ナリマシタ。(單文)	

教法

(一)掛圖を提示して、前時の復習をなす。(問答)

(二)「ソレカラケライニナリマシタ」の言語を練習し、口唱して聽寫せしむ。

(三)板上訂正を行ひ、個讀齊讀によりて讀方を練習せしむ。

(四)文章を解剖して、語句の關係を知らしめ、接續詞「ソレカラ」の

接續詞「ソレカラ」の用法に充分注意せしめねばならぬ。

用法を知らしむ。

(1)「ナリマシタ」に枠をかけて、何になりましたか。

(2)誰か「ケライニ」になりましたか、……主語の省略に注意せしむ、

(3)辨慶は、何時から牛若丸の臣になりましたか。

(4)前時の文章と「ケライニナリマシタ」と接續して、讀ましめたり、又、離して、讀ましめたりして、接續詞が如何なる役目をなすか充分に、了解せしむ。

(五)左の文章を讀解せしめて、接續詞「ソレカラ」の使用法を練習せしむ。

タラウガ　ジラウニ　マケマシタ。[ソレカラ]　トモダチニ　ナリマシタ。

イヌガ　ネコニ　マケマシタ。[ソレカラ]　オナカヨシニ　ナリマシタ。

(六)教科書を開かしめて、讀方を練習せしむ。

第四時

教材　フエ。カタナ。ナギナタ。アシダ。ランカン。

要項　内容＝前時の復習をなして、「フエ」「カタナ」「ナギナタ」「アシダ」「ランカン」等につき授く。

形式＝已授文字の應用練習。

教具　仝前。

教法

(一)前時の内容を復習(問答)しつつ、「フエ」「カタナ」「ナギナタ」「アシダ」「ランカン」等の語を書取らしむ。

(二)書取りたるものにつき、板上訂正を行ひ、簡單にこれ等の事物につき、内容上の問答をなし、已有觀念を整理す。

(三)左の語句、文章を書取らしめて、練習せしむ。

(1)ウシワカマルガ　フエヲ　フイテキマシタ。(2)ベンケイハ　カタナヲ　モラヒタイノデス。(3)ベンケイガ　ナギナタデ　ハラヒマシタ。(4)ウシ

ワカマルハ　アシダヲ　ハイテキマシタ。(5)ウシワカマルハハシノランカンニ　トビノリマシタ。

(四)教科書を開かしめて、本課全文の讀方を練習せしむ。

(五)本を離れて、內容上の問答をなし、談話の練習をなさしむ。

第三十二頁　(三時間)

要旨文體

田草取りの有樣を叙したる叙事文である。これによりて、田草取の狀況、並に、田、畑、畦、畔、稻、麥、芋、大根などの事項を授け、農業の趣味と農夫の勤勞とを知らしめ、「アチラ」「コチラ」「ドコ」の代名詞の用法、及び、「トッテ」「ウタッテ」などの促音を授くるのが、主眼である。

區分

第一時　アチラデモコチラデモタノクサヲトッテキマス。

第二時　ドコデモオモシロイウタヲウタッテキマス。

第三時　タ。ハタケ。アゼ。ウネ。イネ。ムギ。イモ。ダイコン。

第一時

教材　アチラデモコチラデモタノクサヲトッテキマス。

要項

內容＝田草取の必要、及び、方法。

形式＝「アチラ」「コチラ」「デモ」「トッテ」の語法、及び、全文の讀方、書方、綴方。

教具　教科書挿繪の廓大圖。

教材解釋

內容

○田の雜草を除くことを田草取りといひ、苗を移植してから、土用の前後にかけ數

回行ふ。その回數によりて一番草二番草三番草などいふ。農夫は夏の暑い日にも田の草を取ることに勤勞してゐる。青々とした田の面に彼方にも、此方にも農夫が田草取の歌をうたつてゐる有樣は面白く、田園の趣味は更に、深いものである。

(一)語法

○**アチラ**　「アチラ」は自分に最遠い關係にある方向を指示する代名詞である。

○**コチラ**　は自分に最近い關係にある方向を指示する代名詞である。

○**デモ**　は或事物を擧げて置いて、それとかけへだたつた他の事物を聯想させる場合と、或事物を指定してそれに似寄つた他の事物を聯想させる時の天爾乎波である。本時の場合は後の場合である。

○**トツテ**　は文語の「トリテ」の「テ」が四段活用の動詞の「ラ」行の「リ」に續き、その「リ」が促音便になつて「ツ」となつたのである。

(二)文章解剖

主、省略	副	副	客	說
アチラデモ	コチラデモ	タノクサヲ	トツテキマス。(單文)	

教法

(一)掛圖を提示して、左の事項につき問答をなし、既有觀念の整理補充をなす。

(1)田植の時期。(2)田草を取る必要及時期。(3)田草取の方法。(4)田草取の有樣。

(二)口移により、教材の內容につき談話練習をなさしむ。

(三)教材を口唱して、聽寫せしむ(二、三名は板上にかかしむ)。

(四)「トッテ」に注意せしめて板上訂正を行ひ、個讀齊讀によりて讀方を練習せしむ。

(五)文章を解剖して、語句の關係を吟味し、副詞の並列に注意せしめ、意義を了解せしむ。

(1)「キマス」に枠をかけてどうしてゐますか。……說明

(2)「トッテキマス」まで枠をかけて、何を取つてゐるか。……客語

(3)何處で取つてゐるか。……あちらばかりか。……副詞の並列

誰れか取りてゐるのか。……主語の省略に注意せしむ。

(4)「アチラ」「コチラ」を自身の位置と比較し、方向遠近の關係を實際につき説明して、了解せしむ。

(5)「デモ」といふはどういふことか。何のために「デモ」を附けていふのか。

(六)教科書を開かしめて、讀方を練習せしむ。

(七)左の文章に塡字せしめて、讀解練習をなさしむ。

(1)ヒトガ　○○○デモ　○○○デモ　ハタケノ　クサヲ　○○テキマス。

(2)○○○デモ　コチラ○○タイコヲ　タタイテキマス。

(3)アチラノハタト　コチラノハタ。

(4)アチラニユキマシタ。　コチラニキマシタ。

(5)ワタクシハタノ　クサヲ○○テミマシタ。

(八)本を離れて內容上の談話をなさしむ。

第二時

教材　ドコデモ　オモシロイ　ウタヲ　ウタッテキマス。

要項

內容＝前時の復習。

形式＝「ドコ」「オモシロイ」「ウタッテ」等の語法、及び、全文の言語、讀方、書方、綴方。

教具　仝前。

教材解釋

內容

(一)語法

○**ドコ**　は不定の地位を示指する代名詞である。

○**オモシロイ**　は形容詞の連體法であつて、「ウタ」といふ名詞に連つたのである。

(二)文章解

主省	副	客修(形)・客	説
ドコデモ		オモシロイ	ウタヲ　ウタッテキマス。(單文)

教法

(一)掛圖を提示して、前時の內容につき問答をなす。(復習)

(二)教材の文章を口唱して、談話を練習せしむ。

(三)教材の文章を口唱して、書き取らしむ。(二、三名は板上にかかしむ。

(四)「オモシロイ」「ウタッテ」に注意せしめて、板上訂正を行ひ、個讀、齊讀により讀方を練習せしむ。

(五)文章を解剖して、語句の關係を吟味して、全文の意義を了解せしむ。

(1)「ウタッテキマス」に枠をかけて、何をうたつてゐるのか。

(2)何處でうたつてゐるのか。……「ドコデモ」とはどんな所のことか。

(地位の定まらないことを指示する代名詞なることを説明す)

練習

ドコデモ　オモシロイオドリヲ　シテキマス。

ドコデモ　コレハ　ウッテキマス。

(3)誰れか歌つてゐるのか。……主語省略に注意せしむ。

(4)「ドンナ」歌をうたつてゐるのか。……形容詞、客語修飾。

(六)教科書を開かしめて、達讀練習をなさしむ。

(七)左の文章を讀解せしめて、「ドコデモ」「オモシロイ」の語句を練習せしむ。

(八)田草取を見た時の感想及び、實況を話さしめて練習す。

第四時

教材　タ。ハタケ。アゼ。ウネ。イネ。ムギ。イモ。ダイコン。

要項

內容＝前時の復習。田、畑、畔、畦、稻、麥、芋、大根。

形式＝已授文字の應用練習。

教材　仝前。

教法

(一)前時の復習をなす。(内容上の問答)

(二)前時の復習をなしつゝ田、畑、畦、畔等につき問答し舊觀念を整理し、「タ」「ハタケ」「アゼ」「ウネ」などの言語を練習して、綴らしむ。

(三)田にはどんな物を植ゑるか。畑にはどんな物を植ゑるかを問答し、「イネ」「ムギ」「イモ」「ダイコン」等の言語を練習して、綴らしむ。

(四)讀本を開かしめ、本課の全文につきて讀方を練習せしむ。

(五)左の文章をかき取らしめ、綴方練習をなさしむ。

(1)アチラデモ　コチラデモ　ハタケノダイコンヲ　ヒイテヰマス。

(2)コチラノアゼニ　マメガ　ウエテアリマス。　ハタケノウネニイモガウエテアリマス。

(3)コチラノタニイネヲウエマス。　アチラノハタケニムギヲウエマス。

(六)本を離れて、本課全文の話方を練習せしめ、本課の挿繪を見たり、本文を讀んだりして、如何に感じたるかを談話せしむ。

第三十四頁　（三時間）

要旨文體

米屋、肴屋、小間物屋、呉服屋等商店の種類、及び商業の大要を教へ、「ハ」の轉呼音、全文の言語、及び、讀方、書方、綴方等を授くるのが主眼である。

區分

第一時　コメヤノトナリハサカナヤデス。　サカナヤノトナリハコマモノヤデス。

第二時　カドニハ　ゴフクヤガアリマス。
第三時　ミセ。　ノレン。　カンバン。

第一時

教材　コメヤノトナリハサカナヤデス。サカナヤノトナリハコマモノヤデス。

要項　内容＝米屋。　肴屋。　小間物屋。

形式＝「ハ」の轉呼音及び「コメヤ」「サカナヤ」「コマモノヤ」「トナリ」等の言語、全文の讀方、書方、綴方。

教具　教科書挿繪の廓大圖。

教材解釋

内容

○**コメヤ**　は米の賣買をする商店である。
○**サカナヤ**　は魚類を賣買する商店である。
○**コマモノヤ**　は化粧品、袋物、その他、種々の小間物を賣買する商店をいふ。

形式

(一)文字

○**ハ**　原字、結構、筆順は前に説明してある。これは「ハ」の發音が轉じて「ワ」となるので、これを轉呼音と云ふ。

(二)文章解剖

主修　コメヤノ　トナリハ　サカナヤデス。(單文)

説　主　サカナヤノ　トナリハ　コマモノヤデ

教法

(一)掛圖を提示して、「コメヤ」「サカナヤ」「コマモノヤ」等につき簡單に内容上の問答をなし、已有觀念の整理補充をなす。

(二)内容上の談話練習をなさしむ。

(三)全文を口唱して、聽寫せしむ。(一、二名は板上にかかしむ)

(四)「ハ」の轉呼音に注意せしめて、板上訂正を行ひ、個讀齊讀によりて讀方を練習せしむ。

(五)文章を解剖して、形式上の吟味をなし、語句の關係を知らしむ。

(1)「サカナヤデス」に枠をかけて、何れが魚屋か。
「トナリ」に枠をかけて、どこのとなりか。

(2)「コマモノヤデス」に枠をかけて、何れが小間物屋か。
「トナリ」に枠をかけて、どこのとなりか。

(六)教科書を開かしめて讀方を練習せしむ。

(七)左の文章を書取らしめて、「ハ」の轉呼音を練習せしむ。

(1)サカヤノ　トナリハ　アブラヤデス。

(2)タラウサンノウチノ　トナリハ　ジラウサンノウチデス。

(八)左の文章に塡句せしむ。

練習

ジリンウスウラ
ンタトウ
デラナサ

ホカトスス
ヤヤトスス
デシナミ
スモリヤ
○ノハノ

○サハノラ
ンタトウ
ンオトサ

○ミナン
ヤリヤ
デハノ

カミヤノ○○○○　セトモノヤ　デス。
コマモノヤノ　トナリ　ハ　アラモノヤ○○。

(九)本を離れて談話の練習をなさしむ。

第二時

教材　カド　ニハ　ゴフクヤ　ガ　アリマス。

要項

内容＝吳服屋。

形式＝天爾乎波「ニ　ハ」の用法、及び、全文の言語、讀方、書方、綴方。

教具　教科書挿繪の廓大圖。

教材解釋

内容

○ゴフクヤ　吳服、太物、毛織などを賣買する商店を「ゴフクヤ」といふ。

形式

(一)語法

○ニハ　は事物の位置を示す天爾乎波「ニ」と、特に事物を取り出していふ天爾乎波「ハ」と合したのである。

(二)文章解剖

カドニハ（副）　ゴフクヤガ（主）　アリマス（説）。（單文）

教法

(一)掛圖を提出して、前時の復習をなす(問答)。

(二)かどにあるのは何屋なるかを問ひ、「ゴフクヤ」について內容上の問答をなし、已有觀念の整理補充をなす。

(三)本文を口唱して聽寫せしむ(一名は板上にかかしむ)。

(四)板上訂正を行ひ、個讀齊讀をなさしめて、讀方を練習せしむ。

(五)文章の解剖をなし、主語と副詞と說明語との關係を吟味して意義を了解せしむ。

(六)教科書を開かしめて、讀方を練習せしむ。

(七)左の文章を書取らしめて讀方、書方、綴方を練習せしむ。

(1)カドニハ　フトモノヤガ　アリマス。
(2)カドニハ　クツヤ　ガアリマス。
(3)カドニハ　ホンヤ　ガ　アリマス。

(八)呉服屋とは、如何な物を賣買する店かを問答して、話方を練習せしむ。

練習

カドニハ　ヤガアリマス。
ヤドニハ　ヤガアリマス。
ヤドニハ　ヤガアリマス。
ヤドニハ　ヤガアリマス。

第三時

教材　ミセ。ノレン。カンバン。

要項

內容＝店。「ノレン」。看板。

形式＝已授文字の應用練習。

教具　教科書挿繪の廓大圖。

教材解釋

内容

○**店**　は商家の前に棚などを設け貨物を陳列して、人に見せる樣にしてあるのを稱して、店といふのである。

○**ノレン**　(暖簾)は店の入口に掛けて店名、屋號などを染出したものである。

○**カンバン**　は商家などにて往來人の注意を引くために、家名、職業、商品などを木板、鐵板、紙などに文字又は繪畫にて記し、軒頭、又は、門柱に掲げたる標札である。

教法

(一)掛圖を提示して前時の復習をなす(問答)。

(二)掛圖につき商品を賣買する所を惣稱して、店といふことを知らしめ言語を練習して、「ミセ」とかかしむ。

(三)「ノレン」「カンバン」につき内容上の問答をなして、「ノレン」「カンバン」とかかしむ。

(四)教科書を開かしめて、全課の讀方練習をなさしむ。

(五)左の文章を口唱してかかしめ綴り方、讀方を練習せしむ。

(1)ミセニ　ノレンガ　カケテ　アリマス。
(2)ゴフクヤニ　ノレンガ　カケテ　アリマス。
(3)ゲタヤノ　カンバンガ　ダシテ　アリマス。
(4)ミセニ　カンバン。ミセニ　ノレン。

(六)教科書を離れて、話方を練習せしむ。

(七)前課と本課と比較して、人の職業には、農業、商業その他種々の職業があることなどを附說す。

第三十六頁

(二時間)

要旨

夕立前の空模樣、及び、雷鳴の時の有樣を叙したる叙事文である

から、これ等の事項を授くると共に、「イマニ」「ユフダチ」の語法、假名遣を授け、全文の讀方、書方、綴方等を授くるのが主眼である。

區分

第一時　ソラガクモツテキマシタ。カミナリガナリダシマシタ。
第二時　イマニユフダチガキマス。

第一時

教材

ソラガクモツテキマシタ。カミナリガナリダシマシタ。

要項

内容＝夕立前後の自然界の現象。
形式＝已授文字の應用練習をなして、「クモツテ」の促音。

教具

教科書掛圖。

教材解釋

内容

○夕立前後の空模樣　夕立前には、空が、俄に、墨を流した樣に、搔曇りて來ると雷鳴が起りて、慘まじい音がする。そして盆を覆す樣な大雨がふれども、暫くにして、雨が止むと、再び、快晴に復して、自然界が、清涼となるものである。

形式

(一)文章解剖

主　ソラガ　クモツテキマシタ。(單文)　說
主　カミナリガ　ナリダシマシタ。(單文)　說

教法

(一)掛圖を提示して、左の事項につき問答をなす。
(1)夕立前の空模樣。(2)雷鳴。(3)夕立後の空模樣。
(二)教材を口唱して、聽寫せしむ(一、二名は板上にかかしむ)。
(三)板上訂正を行ひ、個讀齊讀によりて、讀方を練習す。

(四)文章を解剖して、主語と説明語との關係を吟味す。

(五)左の文章に塡句せしむ。

(1)○○ガ　フリダシマシタ。　(2)ユキガ　○○○○○○○。

(3)タラウガ　○○○○○。　(4)オチヨガ　○○○○○。

(六)教科書を開かしめて讀方を練習す。

(七)本を離れて、話方を練習せしむ。

練習

アフ　マフ　ヒマ　フミ　マフ　ア
ラリ　シリ　ヨシ　リソ　シリ　ラ
レタ　ダタ　ウタ　ダレ　タダ　レ
ガシ○　ガシ○　シガ○

第二時

教材　イマニユフダチガキマス。

要項

内容＝仝前。

形式＝全文の讀方、書方、綴方、及び假名遣「ユフダチ」。

教具　仝前。

教材解釋

形式

(一)語法、假名遣

○**イマ**は時に關する副詞である。

○**ユフダチ**の假名遣は、「ユウダチ」「ユーダチ」にあらず。

(二)文章解剖

副詞　イマニ　主　ユフダチガ　説　キマス。(單文)

教法

(一)掛圖を提示して、前時の復習(内容につき問答)。

(二)夕立の時の有樣につき問答す。

(三)「ユフダチ」の假名遣に注意せしめて、聽寫をなさしむ。

(四)讀方を練習せしめ、語句の關係、及び意義の精究をなす。

(五)左の文章を書取らしめて、讀解練習をなす。

(1)イマニ　タラウサンガ　キマス。(2)イマニ　オチヨガ　キマス。
(3)イマニ　ユフハンガ　デキマス。(4)イマニ　ユフガタニナリマス。

(六)教科書を開かしめ、前時の教材と共に、讀方を練習す。

(七)本を離れて、談話の練習をなさしむ。

第三十七頁　(五時間)

要旨

桃太郎の童話を授けて、勇壯の志氣を涵養せねばならぬ。そして、本課の前半は、散文にして、後半は韻文を以て叙述したれば、この點に注意して、「ヂ」の發音「へ」の轉呼音、及び、全文の讀方、書方、綴方を授くるのが主眼である。

區分

第一時　桃太郎の幼時、及び「オヂイサン」「ヤマ」「オバアサン」「カハ」。

第二時　前時の復習及び、「オヂイサンハヤマヘシバカリニ。オバアサンハカハヘセンタクニ」。

第三時　桃太郎が鬼が島征伐をなしたこと。

第四時　クルマニツンダタカラモノイヌガヒキダスエンヤラヤ。

第五時　サルガアトオスエンヤラヤキジガツナとクエンヤラヤ。

第一時

教材

桃太郎の童話、及び「オヂイサン」「ヤマ」「オバアサン」「カハ」

要項

内容＝桃太郎の幼時の有樣。

形式＝已授文字の應用練習「ヂ」の發音、及び、文字の讀方、書方。

教具

教科書掛圖桃太郎(一)

教材解釋

内容

この教材を授くる際は常に修身科の事項と聯關し國民思想を涵養するに資すべし。

○昔或處に、お爺さんとお婆さんがゐましたが、二人の間に、子供がないので、たいさう、子供をほしがつてゐました。ある日、お爺さんは、山へ柴刈に、お婆さんは、川へ洗濯に出掛ました。そして、お婆さんが川で洗濯をしてゐますと、川上の方から大きな桃が流れて來ました。お婆さんは、それを拾ひあげて、「お爺さんを喜ばしてあげよう」と思つて持つて歸へりました。

まもなく、お爺さんが、歸へりて來ましたから、お婆さんは、そのことをお爺さんに話しますと、お爺さんは、喜んで、それでは御馳走をいたゞかうと云つて、桃を俎板の上にのせて、庖丁で割らうとしますと、中から、大きな男の子が、「おぎやあ〳〵」といつて、生れました。二人はたいさう喜んで、その子を抱き上げ、桃の中から生れたのだから、名を桃太郎と付けて、大切に可愛がつて育てました。

教法

(一)文字

○ヂ　發音は舌頭舌上音である。筆順、結構、原字は前に説明してある。

形式

この教材は話方練習に適切であるから充分に話しめて練習する樣にすべし。

(一)掛圖を提出して、目的を指示す。

(二)左の各項につき、内容上の説話をなす。

(1)昔或處にお爺さんとお婆さんがありしこと。
(2)お爺さんは山へ柴刈に行き、お婆さんは川へ洗濯に出掛しこと。
(3)お婆さんが桃を拾つて、歸へりしこと。
(4)子供が生れて、桃太郎と名づけて育てしこと。

(三)復演をなしつつ、「オヂイサン」「オバアサン」「ヤマ」「カハ」などの讀方、書方、綴方を授く。

教材

第二時

オヂイサンハヤマヘシバカリニ。オバアサンハカハヘセンタクニ。

要項

内容＝前時の復習。

形式＝「へ」の轉呼音、及、天爾乎波「へ」の用法、全文の讀方、書方、綴方。

教具　仝前。

教材解釋

形式

(一)語法

○へ　は「へ」の轉呼音であつて、動作の移り行く方向を示す天爾乎波である。

(二)文章解剖

主　オヂイサンハ　副　ヤマヘ　補　シバカリニ　省略　説　（單文）

主　オバアサンハ　副　カハヘ　補　センタクニ　省略　説　（單文）

「へ」の天爾乎波は地位を示すとも、あれども、矢張り方向を示すも動作的の意味があるのか、地位を靜的の「ニ」とは間違へてはならぬ。

教法

(一)掛圖を提示して前時の内容を問答す(復習)。

(二)問答の際板書したる「オヂイサン」「ヤマ」「オバアサン」「カハ」を讀ましめ、お爺さんは、山へなにしに、行つたのかと問ひ、「シバカリニ」と書き、お婆さんは川へなにしに、行つたのかを問ひ、「センタクニ」と書き全文の讀方、書方、綴方を練習す。

(三)「へ」の轉呼音、及び、天爾乎波「へ」の用法を授けて練習す。

オトウサンハ　マキバヘ　クサカリニ。

オカアサンハ　マチヘ　カヒモノニ。

(四)文章を解剖して語句の關係を吟味し、説明語の省略されたる點に注意せしむ。

(五)教科書を開かしめて、讀方を練習す。

(六)本を離れて、話方を練習せしむ。

練習

ネエサン　ハヒ　カニ　ハニ　ヘリ
ハマチ　モノ　ハイ　クニ
エヘ　ヒ　ニ　タ　サ
サン　モ　ニ　サ　ト
ヘ　ノ　ニ　ケ　ン

第三時

教材　桃太郎の童話。

要項

内容＝桃太郎が鬼が島を征伐せしこと。

教具　仝前、及び、桃太郎の掛圖(二)

教材解釋

内容

○或日、桃太郎は、お爺さんに向ひ、「私はこれから、鬼が島を征伐して來たいと思ひますから、何卒暫くお暇を願ひたい」と申しました。　するとお爺さんとお婆さんはそれは面白いと云つて、許してやりました。　そして、お爺さんは、出立の仕度をしてやり、お婆さんは、兵糧として、黍團子を拵へてやりました。

桃太郎は、勇んで、家を出掛けました。　すると犬が、一匹出て來て、「桃太郎さん腰に付けて居らつしやるものは、何ですか。「日本一の黍團子」「どうぞ一個くださいお供をしませう」と申しましたから、桃太郎は一個與へて、お供にして行きました。

暫く行きますと、樹の枝から、猿が下りて來て、又、犬の樣に云ひましたから、お供にしてやりました。　又暫くしてひろい野原に出ますと、こんどは、雉が後から追かけて來て、又、家來になりました。　それで桃太郎はこれにも黍團子を與へて、やり

勇壯の士氣を起さしむる樣に說話すべし。

ました。

桃太郎は、そこで、三人の家來を連れて、いよ〳〵鬼が島に渡りました。　島に着いて見ますと、鬼共は大きな城を構へて、堅固な門や、垣を廻らしてゐるから、中々這入ることが出來さうでない、そこで、雉子が、先登第一に空中に舞上りて、お城の中に飛び込み、内から鐵の門をあけました。　すると、犬と猿とがどつと城内に攻込みました。　鬼共は、あはてながらも、必死を盡して、打つてかかりましたので、大戰爭となりましたが、雉が上から腦天目掛けて突きかかり、犬が所かまはずに嚙付き、猿が顏のあたりをやたらに引掻くものだから怖れて、引き下りました。　すると今度は鬼の大將が、大きな金棒を振上げて、桃太郎に打つてかゝりましたが、これも又、何の苦もなく、桃太郎に打ち据ゑられました。　もうこうなりては鬼共も、迚ても叶はぬと思つたのでせう「どうぞ命だけは、助けて、下さい、もう決して日本に邪魔はいたしませぬ」そして私共の持つて居る丈の寶物は、皆、差上げますから」と云つて、降參して、しまひました。　そこで桃太郎は鬼の願を許してやり、金、銀、珊瑚、を始めとして、其他山なす寶物を占領して車に積ませ、その上紀念のためにと、鬼共の角を切り取て、犬に車を引かせ、雉には綱を引かせ、猿には鞭を押さして、

勇ましく凱旋しました。

教法

(一)前時の復習(問答)。
(二)掛圖を提示して目的の指示をなす。
(三)教材解釋に掲げたる順に鬼が島征伐の說話をなす(講演式)。
(四)說話の要項につき復演せしむ。
(五)兒童に話さしめて話方を練習す。

第四時

教材　クルマニツンダタカラモノイヌガヒキダスエンヤラヤ。

要項

內容＝前時の說話の復習。

形式＝已授文字の應用練習、及び七、五調の韻文。

教具　仝前。

教材解釋

內容形式

○桃太郎の歌。

桃から生れた桃太郎。氣は優しくて力持ち、鬼が島をば討たんとて、勇んで家を出かけたり。日本一の黍團子、情けにつきくる犬と猿、雉も貰ふてお供する、急げものども後るなよ。激しい軍に大勝利、鬼が島をば攻め伏せて、取つた寶は何々ぞ、金銀珊瑚綾錦、車に積んだ寶物、犬が引出すエンヤラヤ、猿が後押すエンヤラヤ、雉が綱引くエンヤラヤ。(　　)

○**エンヤラヤ**　は物を引く時の掛聲である。

(一)文章解剖

客修　クルマニツンダ　客　タカラモノ　主　イヌガ　說　ヒキダス　副一　エンヤラヤ。(七五調の韻文)

「イヌガ、クルマニツンダタカラモノヲヒキダスエンヤラヤ」と云ふ意味。

教法

(一)前時の復習(問答)。

(二)教科書の挿繪を觀察せしめ、問答をなして全文を讀ましむ。

(三)如何なる意味のことが書いてあつたかを問答す。

(四)韻文を左の如き散文に書き直して、その意義を了解せしむ。

クルヤニツンダ　タカラモノヲ　イヌガ　エンヤラヤト　ヒキダシマス。

(五)達讀練習をなし、且つ本を離れて話方を練習す。

第五時

教材　サルガアトオスエンヤラヤ。キジガツナヒクエンヤラヤ。

要項

内容形式＝前時に仝じ。

教材解釋

形式

(二)　章解剖

主	客說	副	主	客說	副
サルガ	アトオス	エンヤラヤ	キジガ	ツナヒク	エンヤラヤ。

(七五調の韻文)

教法

(一)掛圖を提示して前時の復習(問答)。

(二)挿繪を觀察せしめて、左の問答をなす。

(1)犬はどうしてゐるか。(2)猿は……(3)雉は……(4)桃太郎は……

(三)教科書を讀ましめて、意義を問答す。

(四)韻文を左の如く散文に書き直して、語句の關係を吟味す。

サルガ　エンヤラヤト　コエヲカケテ　アトカラ　オシマス。キジガ　ツナヲ　ヒイテ。エンヤラヤト　コエヲカケマス。

(五)教科書につき本課の全文を讀ましめて、概括的復習をなす。

(六)本を離れて、話さしめ、且つ譜に合はして謠はしむ。
(八)桃太郎の話を聞き、又、本を讀んで、如何に感じたるかを問答す。

第四十頁　(三時間)

要旨文體

朝顔の花のことを叙述したる叙事文である。花の形態、及び、色に關する觀念を與ふると共に、「ホ」の假名遣、「ヅ」の發音を授け、全文の讀方、書方、綴方等を授くるのが主眼である。

區分

第一時　アサガホガサキマシタ。アカイノヤ、シロイノヤ、イロイロマジッテキマス。
第二時　イクッサイタカカゾヘテゴラン、ナサイ。
第三時　アカ。アヲ。キ。ムラサキ。

教材

第一時

アサガホガサキマシタ。アカイノヤ、シロイノヤ、イロイロマジッテキマス。

要項

内容＝朝顔の形態、種類、効用等を授く。

形式＝「アサガホ」の假名遣、及び、「アカイノヤ」「シロイノヤ」の天爾乎波「ノ」「ヤ」の用法を授け、全文の讀方、書方、綴方等を練習す。

教具　朝顔の花の實物及び掛圖。

教材解釋

内容

○朝顔の莖は、蔓となりて、左巻に、他物に、巻きついてゐる。葉は通常互生で、三裂なるもの、又、四裂なるものもある。花は合瓣花にして、漏斗狀をなし、蕾のときは、花

瓣の先が捩ぢれて疊まれてゐる。果實は、略球形をなして、三室に分れ、各室に一個、若くは、二個の種が含まれてゐる。朝顔は花を賞するために、盛に、栽培せらる。その結果種々の變種を生ずるに至つた。

朝顔を栽培するには土と泥土又は堆肥を混合して、鉢に入れ、五月の初頃播種し、二葉の間より心を發せんとする頃鉢に移植し、後度々、乾鰻、油糟、白水などの肥料を施さねばならぬ。そして、漸次生長するに從ひ、竹を立てて、これに纏はしめ、心を摘みて枝をはびこらしむる樣にせねばならぬ。若し、大輪の花を咲かしめんには、蕾をつみとりて、花の數を少くせねばならぬ。

形式

(一)語法假名遣

○**アサガホ**(朝顔)　の假名遣は「アサガヲ」又は「アサガオ」にあらずして、「アサガホ」なれば、注意して教授すべし。

○**ノ**　本課の場合に於ける天爾乎波「ノ」は「ユリノハナ」の場合の天爾乎波「ノ」とは異りて、名詞「ハナ」の代りに用ゐられたのである。即ち用詞、助動詞の連體法に附いた場合は、名詞の代りとなる。

○**ヤ**　は事物を並列する意味を示す天爾乎波であるけれども、呼掛に用ゐることもある。事物を並列する場合にも「ト」とは異りて、事物が、まだ、外にもある意味を表はす。そして最後の體詞には添へることはない。

(二)文章解剖

主　アサガホガ　サキマシタ(單文)。　説

主語並列　アカイノヤ、シロイノヤ　副詞　イロイロ　マジツテ　説

サキマス。(單文)

教法

(一)朝顔の花の實物、及び、掛圖を提出して目的の指示をなし、左の各項につき問答して、朝顔に就ての舊觀念の整理補充をなす。

(1)朝顔の葉、莖、根。(2)莖の卷き方。(3)花の形態及び色。(4)種類。(5)効用栽培法。

(二)「アサガホ」の假名遣に注意せしめて、全文の聽寫をなさしむ。

(三)個讀、齊讀によりて讀方を練習しつつ意義を了解せしむ。

(四)左の問答をなし、「ノ」「ヤ」の天爾乎波の意味、用法を授け、主語の並列したる文章の形式を授く。

(1)「マジッテキマス」を讀ましめて、何が交りてゐるか。

(2)「アカイハナヤ」「シロイハナヤ」といふことは、唯赤い花と白い花との二つが交りてゐるといふことのみか。

(3)まだ外にも交りてゐるといふことが何にて分るか……「イロイロ」

(4)「イロイロナハナ」につき問答。

(五)左の文章を提示して讀解練習をなす。

(1)オホキイノヤ　チイサイノヤ　イロイロマジッテキマス。

(2)キレイナノヤ　キタナイノヤ　イロイロマジッテキマス。

(3)キイロイノヤ　シロイノヤ　イロイロサイテキマス。

(六)左の語句を口唱して書取らしめ、假名遣の練習をなす。

(1)アカイアサガホトシロイアサガホ。

(2)ワタクシハケサカホヲアラヒマシタ。

(3)ユフガホノハナガ　サキマシタ。

(七)教科書を開かしめて達讀練習をなす。

(八)本を離れて話方を練習せしむ。

第二時

教材　イクッサイタカ　カゾヘテ　ゴランナサイ。

要項

内容＝前時の復習をなし美感を起さしむ。

形式＝「イクッ」「カ」の語法、「ゾ」の發音、及び、全文の讀方、書方、綴方。

教具　仝前。

教材解釋

形式

(一)語法

○**ゾ**　の發音は舌頭音である。

○**イクツ**　は疑問に關する副詞である。「イクラ」。「イクニン」。「イクバク」などに同じ。

○**カ**　は疑問の意を表はしたり、幾つかの事物を並べてその内のどれかが不明である意を示したり、疑問の語の下について不定の意を示したり、又、疑問の意を強くして、反語の意味を表はしたりする天爾乎波である。本課の場合は、疑問の意味を表はしたるものである。

(二)文章解剖

主省略	主省略	副	說	說
アサガホノハナガ		イクツ	サイタカ(疑問文、單文)。	
アナタハ	客語	カゾヘテ	ゴランナサイ(命令文、單文)。	說

教法

(一)朝顏の實物及び掛圖を提示して、内容上につき前時の復習をなす。

(二)「ゾ」の發音、及び、文字の書方を問答して、全文を聽寫せしむ。

(三)個讀齊讀によりて讀方の練習をなす。

(四)「イクツ」「カ」につき天爾乎波の表はす意味を授けて、疑問文の形式を知らしめ、「何が幾つ咲いたか」を問ひ、主語の省略せられたる點に注意せしむ。

(五)「ゴランナサイ」の意味を問答して、命令文の形式を知らしめ、「誰れに數へよといつたのか」を問ひ、主語の省略せられたる點に注意せしむ。

(六)「ゾ」の音を有する事物名を擧げしめ、已授文字のみよりなれるものは書取らしむ。

(七)左の文章を塡字せしめ、讀解の練習をなす。

(1)ナシガ　○○○アル○　カ○ヘテ　クダ○○。

(2)ボタンノハナガ　○○○　サイタカ　○○○　テ　○○○ナサイ。

(八)以上の文に○をき「ナシガアリマス」。「ボタンノハナガサキマ

シタ」などの文を結合して、主語「ナシ」「ボタンノハナ」などの主語を省略せしむ。

(九)教科書を開かしぬて、達讀練習をなす。

第三時

教材　アカ。　アヲ。　キ。　ムラサキ。

要項

内容＝前時の復習をなしつつ赤、青、黃、紫等の色の觀念を確實にす。

形式＝已授の文字、文形の應用練習。

教具　前時の教具、及び、色の掛圖。

教法

(一)掛圖及び「アサガホ」を提示して、前時の復習をなしつつ、その色の名稱を言はしめて書取らしむ。

(二)色に種々あることを知らしめ、色の掛圖につき、赤、青、黃、紫その他の色を問答して、色に關する觀念を確實にす。

(三)「アカ」「アヲ」「キ」「ムラサキ」等の語を使用して、已授の文形により綴方練習をなす。

例

(1)アカイノガ　イクツアルカ　カゾヘテ　ゴランナサイ。
(2)アヲイハガ　イクマイアルカ　シラベテ　ゴランナサイ。
(3)アサガホノハナニハ　ムラサキモアリマス。
(4)キウリノハナハ　キイロデアル。

(四)教科書を開かしめ、本課の全文につき讀方の練習をなして概括す。

色に就ては原色を授けてその配合により種々の間色を得るのを知らしむべし。

第四十二頁　(三時間)

要旨

鯉の形態、習性を叙したる叙事文である。鯉、鮒、鯛の形態、習性、効用等を知らしむると共に、轉呼音「ヒ」及び「一」「二」「三」「四」「五」の漢字を授け、二人の兄妹が仲よく遊んで見てゐることなどを知らしむるのが主眼である。

區分

第一時　ヒゴヒガ、一ビキ、二ヒキ、三ビキ、四ヒキ、四ヒキマス。
第二時　アチラカラモ一ビキキマス。アハセテ五ヒキデス。
第三時　タヒ、コヒ、フナ、ヒレ、ウロコ。

第一時

教材　ヒゴヒガ、一ビキ、二ヒキ、三ビキ、四ヒキ、四ヒキマス。

要項

内容＝鯉の形態、習性、種類、効用。

形式＝轉呼音「ヒ」及び「一」「二」「三」「四」の漢字「ヒキ」「ビキ」「ビキ」等の區別を知らしめ、全文の讀方、書方、綴方。

教具　教科書掛圖。

教材解釋

内容

○**コヒ**　鯉はその體、縱に扁平にして、紡維狀である。全面平滑であつて、水の抵抗を減じ、四肢は鰭となつて水中を泳ぐことが出來る樣になつてゐる。即ち胸鰭、腹鰭である。外に脊鰭、尾鰭、臀鰭ありて運動を助けてゐる。然し鯉の前進するは鰭を以て水をかき進むでなく、體を左右に屈曲するによりて前進す。即水を後方に壓して體を前方に進むるのである、鰭は徐に運動する時又は靜止する時に用ゐらる。その皮膚には縱に三十六枚の鱗を被り、口の左右には二對の鬚を備へ、圓くして鋭き眼を有す。「マゴヒ、ヒゴヒ」の種類がある。眞鯉は黑色なれども、緋鯉は赤黃色にして美麗である。共に滋養分に富み、食用に供られ又觀賞

用として飼養せらる。鯉を飼養するは、五月初め頃産卵したる水草を別池に移して、自然に孵化せしめ、後幼魚を水田に移し、秋に至りて又本池に移すのである。その餌には、「ミジンコ」、蠶蛹、米、などを用ふ。

形式

(一)文字語法

○ヒ　の發音は「イ」に轉ず。

○一二三四五　筆順——四は「丨」ノ乚一　五は一丨冂一　結構——二　上短下長間隔あるようにかくべし。　三　同間隔にかいて中短下長にかくべし。　四　上廣く下狹くかくべし。　五　第二畫と第三畫と全角度に傾けてよし。

(二)文章解剖

主　ヒゴヒガ　獨立部

一ピキ二ヒキ三ビキ四ヒキ　副

四ヒキ　キマス。　說

(單文)

教法

(一)掛圖を提出して目的の指示をなす。

(二)左の各項につき問答を行ひ、既有觀念の整理補充をなす。

(1)鯉の形態。(2)住所。(3)習性。(4)種類。(5)効用。(6)飼養法。

(三)挿繪の子供は何をしてゐるかを問ひ、池の鯡鯉を見て、數へてゐることを授け、更に魚類を數ふる時は何といふ名を附けて數ふるかを問答して、「一ピキ」、「二ヒキ」、「三ビキ」、「四ヒキ」、など算術科と聯絡して、數へ方を練習す。

(四)一、二、三、四の文字の書方を授けて、全文を書き取らしむ。

(五)板上訂正を行ひ、特に「ヒゴヒ」に注意せしめて讀方を練習す。

(六)文章を解剖して左の問答をなし、語句の關係を吟味す。

(1)「キマス」に枠をかけて何がゐるか。……

(2)何匹ゐるか。

(6)どうして四匹ゐることが分つたのか。

(4)何といつて數へたのか。……文章の獨立部

(七)「ヒゴヒ」の代りに、他に適當なる事物を用ひて、話方、綴方を練習せしむ。

(八)左の語句を書取らしめて、假名遣を練習す、
(1)アカイ　ヒゴ　ヒガ　四ヒキ　キマス。(3)メダカガ　三ビキ　キマス
(2)クロイ　マゴ　ヒガ　三ビキ　キマス。(4)フナガ　一ビキ　キマス

(九)「ビ」「ビ」の音を有する事物名を擧げしめて、發音を練習し、五十音圖に記入して、讀方を練習す。

(十)教科書を開かしめて、達讀練習をなす。

第二時

教材　アチラ　カラモ　一ビキ　キマス。　アハセテ　五ヒキデス。

要項

内容＝前時の復習。

形式＝「カラ」の語法、及び、全文の讀方、書方、綴方。

教具　仝前。

教材解釋

形式

(一)語法

○**カラモ**　「カラ」は動作の起點を示す天爾乎波で、「モ」は復數を表はす天爾乎波である。

(二)文章解剖

[主省]アチラ(副)カラモ(副)一ビキ(副)キマス。(說)[主省]アハセテ(副)五ヒキデス。(說)(單文)

教法

(一)掛圖を提示して、前時の内容につき、復習をなす。

(二)教師範讀しつつ、「五」の文字を問答し、讀方を授く。

(三)個讀齊讀によりて、讀方を練習し、内容の精究をなす。

(四)「五」の字の書方を授けて、全文を書取らしむ。

(五)文章を解剖して、二文章とも、主語の省略されたる點に注意せしむ。

(六)一、二、三、四、五、等の文字の表はす數だけ、鯉の略畫をかかしむ。

第三時

教材　タヒ。　コヒ。　フナ。　ヒレ。　ウロコ。

要項

内容＝「タヒ」「コヒ」「フナ」の形體、習性の差異、及び、效用。

形式＝已授文字の應用練習。

教具　鯛、鯉、鮒の掛圖。

教材解釋

内容

○**タヒ**　鯛は、鮒に似たる魚にして、海に住む。肉白く、味、美なるを以て、魚類の第一として珍重せられ、慶賀の場合などは、特に之を用ふ。

○**フナ**　鮒は、鯉に似たる魚にして、淡水に住む。金魚は、即ち、鮒が人爲陶汰の結果、變成したるものである。鮒は、食用に供すれども、金魚は、主として、觀賞用に供せらる。

教法

(一)掛圖を提出して、鯉の形態、習性、種類、效用等につき復習し、鯉に似たる魚類の名を擧げしめ、「タヒ」「フナ」の掛圖を示し、鯉との異同を問答しつつ、簡單に鯉、鮒に就ての已有觀念を整理す。

(二)「コヒ」「フナ」「タヒ」の名稱を綴らしめ　方を練習す、

(三)「ヒレ」の名稱及び「ウロコ」につき、問答して書取らしむ。

(四)本課の文形によりて、「フナ」「タヒ」を用ゐて、綴り方を練習す。

(五)「コヒノウロコ」「フナノヒレ」、「タヒノアタマ」などの語句を書取らしむ。

(六)教科書を開かしめて、本課の全文を讀ましめ、概括的練習をなす。

(七)本を離れて、話方を練習す。そして、兄妹二人の子供につき、その感想を言はしめて、養魚池などにて、遊ぶ時の心得を授く。

第四十四頁

(二時間)

要旨文體

瘤取りの童話によりて、多慾の戒むべきことを授け、全文の讀方、書方、綴方等を授くるのが主眼である。そして、「トラレ」「ツケラレ」の語法を充分に了解せしめねばならぬ。

區分

第一時　ヨイオヂイサンハコブヲトラレテヨロコビマシタ。

第二時　ワルイオヂイサンハコブヲツケラレテコマリマシタ。ヒダリ、ミギ、マヘ、ウシロ。

第一時

教材　ヨイオヂイサンハコブヲトラレテヨロコビマシタ。

要項

内容＝瘤取の話によりて多慾の戒むべきことを知らしむ。

形式＝「ア」の發音、及び「トラレテ」の語法、全文の讀方、書方、綴方を授く。

教具　教科書掛圖。

教材解釋

内容

○むかし〳〵、或處に氣質のよいお爺さんがありて、右の頬に大きな瘤があるので

たいさうてまつてゐました。或時このお爺さんが、山へ柴刈りに行きましたら、俄かに雨に逢つて、歸へることが出來ないものだから、大樹の空洞の中へ這入りて、泊つてゐました。すると、その中に、雨も晴れましたが、夜がだん〳〵ふけて、何だか、恐いと思つてゐる所へ、鬼共が、空洞の前に集りて、酒宴を始め、面白き拍子、て、歌をうたつて踊りだしました。お爺さんは、大さう面白く思つてゐました。このお爺さんは、元來踊が、大好で、上手なものだから、面白さの餘り覺えずに、飛び出して、一つ踊ると、鬼共は、とんでもないものが來たと驚いてゐましたが、お爺さんの踊が甘まいので、後には大さうよろこんで、こんな、面白いことは生來始めてだ、どうぞ、明晩も來て、踊りて下さいと願つて、その約束の印として、その瘤がよからうと云つて、お爺さんの瘤を捩ぎとりて、夜明け方に、何處へか皆行つてしまひました。

お爺さんは、苦にしてゐた瘤をとられて、非常に喜んで、家へ歸へりました。すると、このお爺さんのお隣に、一人のお爺さんがありまして、左の頰に、大きな瘤がありましたが、このお爺さんの話をきいて、直に、羨ましくなり、己も一つ鬼に、瘤を取りて貰はんと思ひ、お爺さんから聞いた通にして、山に行つて、木の空洞の中にかくれて、待つてゐました。

やがて、その時間になると、又、鬼共は、約束通りに來て、昨夜の樣に、酒宴を始めて、「昨夜のお爺さんは來ないがどうしたのだう」と話し合つてゐる。お爺さんは、今こそと思つて踊りて出ましたが、元來舞は下手な人だから、調子がはづれて、只、跳ね廻るばつかり。鬼共は、「何だ今夜のは些とも面白くないぞ、瘤をかへしてやらうぢやないか」と言つて、昨夜約束の印にと取つておいた瘤を、お爺さんの右の頰に投げつけました。お爺さんは瘤を取つて貰ふ積りであつたが、却つて今一つ、瘤をつけられて、口惜がつて、瘤を兩手で抑へながら、泣く〳〵我家へ歸へりました。

形式

(一)文字、語法

○ブ　原字、筆順、結構等は前に說明してある。發音は唇音である。

○トラレテツケラレテ　の「ラレテ」は受動態の助動詞「ラレ」が動詞第一活段に續き、中止法となつたのである。

(二)文章解剖

(1)ヨイオヂイサンハ（主）　コブヲトラレテ（副詞的修飾語）　ヨロコビマシタ。（說）（單文）
(2)ワルイオヂイサンハ（主）　コブヲツケラレテ（副詞的修飾語）　コマリマシタ。（說）（單文）
（客說）　（客說）

教法

(一)掛圖を提出して、目的を指示す。
(二)教材解釋の處に掲げたる內容上の說話をなす(講演式)。
(三)說話の要項を復演しつつ、左の語句の讀方、書方、綴方を練習す。
(1)ヨイオヂイサン。(2)ワルイオヂイサン。(3)ミギ。(4)ヒダリ。
(四)成るべく多く談話せしめて、話方を練習せしむ。
(五)「ブ」の音を有する事物名を擧げしめて、發音を練習す。

この教材には更に一時間を配當し「ラレテ」の練習を主として綴方を課すべし。

第二時

教法

(一)掛圖を提示して、前時の內容を復習しつつ、適宜に、主語と說明語とを板書す。
ヨイオヂイサンハ……ヨロコビマシタ。
ワルイオヂイサンハ……コマリマシタ。
(二)左の問答をなして文章を展開して、主語と客語、及び、說明語との關係を吟味し「テ」にて中止されたることを說明す。
(1)よいおぢいさんはどうしたか。こぶをとられたらどうしたか。
(2)「コブヲトラレマシタ」「ヨロコビマシタ」を接續するに中止法を用ゐたることを說明す。
(3)「ワルイオヂイサン」も同樣に問答して文形を知らしむ。
(三)個讀齊讀によりて、讀方を練習し、且つ書方、綴方を練習す。
(四)說話の要項を更に問答して、「よいおぢいさん」と「わるいおぢいさん」との行爲につき、道德的判斷をなさしむ。
(五)教科書を開かしめて、達讀練習をなす。

第四十六頁

（三時間）

要旨文體

火事の有様と消防隊の活動とを叙したる叙事文である。火事の際に消防隊の活動する有様を知らしむると共に、火災時に於ける心得を授け、「ポ」「プ」の發音、及び、全文の讀方、書方、綴方を練習し、修辭上反覆法を用ゐたることを授くるが主眼である。

區分

第一時　カネガナル。ヒケシガトンデイク。ポンプヲヒイテハシル。
第二時　ハシゴヲカツイデイソグ、イソゲ、イソゲ。
第三時　全課の總練習。

教材

第一時

カネガナル。ヒケシガトンデイク。ポンプヲヒイテハシル。

要項

内容＝火事の時の有様。消防隊の活動。
形式＝「ポ」「プ」の發音、及び、全文の讀方、書方、綴方。

教具

教科書掛圖。

教材解釋

内容

○出火、及び鎭火の報知は、火の見梯子の半鐘を亂打して、これを知らせる。その警鐘に、すりばん、みつばん、ふたつばん、しらせ等、距離の遠近によりて、差別がある。火を消し止め、又、これを未然に防ぐ人を消防夫、又は、仕事師、火消しなどといふ。消防に用ふる器具は、水道、ポンプ、梯子、救助袋、鳶口、目標などがある。

形式

(一)文字

○ポプ　原字、筆順、結構は前に説明してある、發音は唇音である。

鳶口は家屋を破壞するに用ふ。

目標は屋上に立てて其の組の消防區域なることを標示して、これと進退を共にせしむ。

(二)文章解剖

(1)カネガ(主)ナル(説)。(2)ヒケシガ(主)トンデイク(説)。(3)ポンプヲヒイテ(副詞的修飾語)(主)客(説)ハシル(説)。(皆常態の單文である)

教法

(一)掛圖を提出して、火事、火消し、消防具等につき問答し、既有觀念の整理補充をなす。

(二)「ポンプ」の書方を授け、全文を口唱して、書取らしめ、板上訂正をなす。

(三)個讀、齊讀によりて、讀方を練習す。

(四)文章を解剖して、語句の關係を吟味し、意義を問答す。

(五)常態の語句を崇敬態の文章に改作して、その差異を知らしむ。

(1)カネガナリマス。(2)ヒケシガトンデイキマス。(3)ポンプヲヒイテカケマス。

(六)「ポ」「プ」の音を有する事物名を擧げしめて、發音を練習し、已授文字のみよりなるものは、書き取らしむ。

(七)讀本の文章を讀ましめて、達讀練習をなす。

第二時

教材　ハシゴヲカツイデイソグ。イソゲ、イソゲ。

要項

内容＝前時に仝じ。

形式＝全文の讀方、書方、綴方。

教材解釋

形式

(一)文章解剖

主　客
ハシゴヲ　カツイデイソグ。（單文）

主　說
イソゲ、イソゲ。（命令文單文）

說（副詞的修飾語）

(二)修辭法

○イソゲ、イソゲ　は反覆法である。反覆して、その感じを深くするために用ゐられるので、これによりて意味を強くするのである。

教法

(一)掛圖を提示して、前時の復習をなす。

(二)教材の內容につき談話練習をなして、聽寫せしめ、板上訂正をなす。

(三)個讀、齊讀によりて、讀方練習をなす。

(四)文章を解剖して、語句の關係を吟味し、主語の省畧、反覆法を用ゐたることを說明す。

(1)「カツイデイソグ」に枠をかけて、何をかついで急ぐか。

(2)何故に急ぐのか。

(3)「イソゲ、イソゲ」とは誰れが誰に向つて云つたのか……主語省略。

(4)何故「イソゲ、イソゲ」と二度くり返すのか。

(5)二度くり返した爲めに意味がどんなに爲るか。

(五)常態の文章を崇敬態の文章に、改作せしむ。

(1)ハシゴヲカツイデイソギマス。(2)イソギナサイ、イソギナサイ。

(六)左の文章を讀ましめて、讀解練習をなす。

(1)クルマヲヒイテ　ハシル。　ハシレ　ハシレ。

(2)トビグチヲカツイデ　イソグ　イソゲ　イソゲ。

(七)讀本の文章を讀ましめて、達讀練習をなす。

練習

ハルニ　タツ
イカツモハ　ヲシモ
イソグイシ　レ
ソゲデヲレ
ゲ

第三時

教材　全課の總練習。

要項

內容＝前時の概括的練習をなさしめ、主として、常態の文章を崇敬態の文章に改作せしむ。

教法

(一)掛圖を提出して、內容の問答(復習)をなす。

(二)火事の際に處する心得、及び、隣家の火事に駈け行き、消防の妨害等にならざる樣訓話す。

(三)個讀、又は、齊讀をなさしめて、全課の讀方を復習す。

(四)內容の意義を精究す。

(五)左の文章を讀解せしめて、崇敬態の文章に改作せしむ。

(1)ラッパガ　ナル。(2)ヘイタイガ　カケテ　イク。

(3)タイハウヲヒイテ　ハシル。(4)テッパウヲカツイデ　イソグ。

(5)イソゲ、イソゲ。

(六)教科書につき讀方を練習し、且つ、本を離れて話方を練習す。

第四十八頁

(三時間)

要旨

繩飛び遊戲の有樣を叙したる叙事文である。繩飛び遊戲の方法と、その趣味を知らしめ、「ペ」の發音、及び、「六」「七」「八」「九」「十」等の文字を授け、全文の讀方、書方、綴方等を授くるのが主眼である。

區分

第一時　(自四十八頁一行至四十八頁六行)ワタクシガ……オモチナサイ。

第二時　(自四十九頁一行至四十九頁六行)サア……十ペン。

第三時　全課の總練習。

第一時

教材　(自四十八頁一行至四十八頁六行)ワタクシガ……オモチナサイ。

要項

內容＝繩飛び遊戲の方法。

形式＝「アナタ」「カラ」の語法を練習し、複文の形式を授け、全文の讀方、書方、綴方を授く。

教具　教科書掛圖。

教材解釋

形式

(一)語法

○**ソチラ**　は自分に稍遠い關係にある方向を指示する中稱の指示代名詞である。

○**カラ**　は動詞、助動詞の四段活用、又は、三段活用について、一つの事柄が他の事柄の原因となつたり、理由となりたりする意味を示す天爾乎波である。

(二)文章解剖

主	客修	客	説	主	客修	客	説
ワタクシガ	コチラノ	ハシヲ	モツカラ	アナタハ	ソチラノ	ハシヲ	

オモチナサイ(複文)。

練習

ワタクシガ　モツカラ
ハシヲ　ソチラノ
アナタハ　コチラノ
モツカラ　ハシヲ
オモチナサイ。

教法

(一)掛圖を提出して、繩飛び遊戯の方法につき問答して、既有觀念の整理補充をなす。

(二)口移によりて、教材の内容を談話す。

(三)教材を口唱して聽寫せしむ。

(四)板上訂正を行ひ、個讀、齊讀によりて、讀方を練習す。

(五)文章を解剖して、語句の關係、及び從屬節と主要節との關係を吟味し、複文の形式を授け、内容の意義を知らしむ。

(1)「オモチナサイ」に枠をかけて、何を……客語
(2)どの端をお持ちなさいといふのか……客修
(3)誰れに、そちらの端をお持ちなさいといふのか……主語
(4)「モツ」に枠をかけて何を……客語
(5)どの端を持つといふのか……客修
(6)誰れがこちらの端を持つといふのか……主語

(7)私はこちらの端を持つ、あなたは、そちらの端をお持ちなさい。即主要節と從屬節とに枠をかけてその關係を問答し、天爾乎波「カラ」の用法を知らしむ。

(六)讀本の文章を讀ましめて、達讀練習をなす。

(七)本を離れて、內容の談話をなさしむ。

第二時

教材　(自四十九頁一行至四十九頁六行)　サ　ア……十ペン。

要項

內容＝前時に仝じ。

形式＝「ペ」の發音、「六」「七」「八」「九」「十」の文字及び、全文の讀方、書方、綴方。

教具　教科書掛圖。

教材解釋

形式

(一)文字、語法

筆順—「六」一ノ丶「七」一し「八」ノ乀「九」ノ乀「十」一ー

○**サア**は促し誘ふ場合に用ふる語である。即ち呼掛の獨立語である。

○**ペ**　原字、筆順、結構は前に說明してある。發音は唇音である。

○**ペン、ペン**　は回數度數を表はす助數詞である。

(二)文章解剖

呼掛獨立語　サア　主(呼掛の主語)　タケヲサンカラ　主省　オトビナサイ(命令文單文)。說

一ペン　二ヘン　三ペン　四ヘン　五ヘン　六ペン　七ヘシ　八ヘン

九ヘン　十ペン(獨立部)。

教法

(一)掛圖を提示して、前時の內容につき復習(問答)す。

(二)讀本を讀ましめて、六、七、八、九、十の文字の讀方、書方を教授す。

(三)文章を解剖して、語句の關係を吟味して、內容の意義を授く。
(四)讀本の文章を筆寫せしむ。
(五)左の文章を讀ましめて、讀解練習をなす。

ワタクシハ　十ペントビマシタ。ワタクシハ五ヘントビマシタ。
アナタハ　三ベンデシタ。二ヘンマケマシタ。
サア　コレカラ　マタトビマセウ。サア　ハヤク　オトビナサイ。

(六)「ベ」の音を有する事物名を擧げしめ、發音を練習し、已授文字のみより成れるものは書き取らしむ。

第三時

教材　全課の總練習。
要項　前時に仝じ。
教具　前に仝じ。

教法
(一)教科書を開かしめ、全文の讀方を復習す。
(二)掛圖を提出して、內容の意義を問答す。
(三)一、二、三、四、五、六、七、八、九、十の文字を書き取らしめ、算術料と聯絡して、書方の練習をなす。
(四)「コチラ」「ソチラ」「サア」等を使用して話方をなさしむ。

ワタクシガ　コチラノハシニノルカラ　アナタハソチラノハシニオノリナサイ。サア　ノリマセウ　一、二、三。

(五)教科書につき達讀練習をなし、且、本を離れて話方を練習す。

第五十頁　(三時間)

要旨
文體　兒童の外出先きに於ける心得を叙したる崇敬態の叙事文であ

る。外出の時、外出したる時、歸宅する時などに就ての心得、並に、教師の教訓を守りて、父母に仕ふべきことを教ふると共に、已授の文字、語句を練習しつつ稍、複雜なる文章の讀方、書方、綴方を授くるのが主眼である。

區分

第一時（自五十頁一行至五十頁六行）ユフガタニ……シンパイシマス。
第二時（自五十一頁一行至五十一頁六行）イツカ……ワルイコトデス。
第三時　全課の總練習。

第一時

教材（自五十頁一行至五十頁六行）ユフガタニ……シンパイシマス。

要項

内容＝外出する時、及び、外出先に於ける心得。

形式＝「パ」の發音、及び已授の文字、語句の應用練習。

教具　教科書掛圖。

教材解釋

形式

(一)文字、語法

○パ　原字、筆順、結構は前に説明してある。發音は唇音である。

○ハヤク　は時に關する意味を表はす副詞である。

(二)文章解剖

(1)ユフガタニ（補語）　ナリマシタ（説）。（主語の省略されたる單文である）。

(2)主省　ハヤク（副）　カヘラナイト（説（副詞節））　オカアサンガ（主）　シンパイシマス（説）。（説明節）（複文）

教法

(一)教科書を讀ましめて、大意を問答す。

(二)掛圖を提出して、内容上の問答をなし談話の練習をなす。

(三)個讀、齊讀によりて、讀方の練習をなす。

(四)教材(2)の文章を口唱して、書取らしめ、左の問答をなして、語句の關係、及び、主要節と從屬節との關係、天爾乎波「ト」の用法を知らしむ。

(1)「シンパイシマス」に枠をかけて、誰れが、心配するか。……主語

(2)お母さんが、如何なる時に心配するか。……副詞節

(3)誰れが、早く、歸らないと心配するのか。……主語省略に注意せしむ。

(4)「私共が早く歸らない」「お母さんが心配します」につき「ト」の用法を問答して、副詞節と說明節との關係を吟味す。

(五)「パ」の音を有する事物名を擧げしめて、發音の練習をなし、已授文字のみよりなれるものは、書取らしむ。

(六)教科書を讀ましめて、達讀練習をなす。

(七)本を離れて、話方を練習せしむ。

練習

オナタハカオンパス
ヒリヽ○ヤナトイガ
ルマクイウシシ
ニシイトサマン

第二時

教材　(自五十一頁一行至五十一頁六行)　イツカ……ワルイコトデス。

要項

内容＝教師の教へを守り、父母に、心配を掛けぬ樣に心掛くべきこと。

形式＝前時に仝し。

教具　前時に仝じ。

教材解釋

形式

(一)文章解剖

副　イツカ
主　センセイガ
補　オハナシニ
客　シンパイヲ
補說(主)　カケルノハ
補　ワルイコト
說　デス
說　ナリマシタ(混文)
ト

教法

(一)掛圖を提出して、前時の內容につき問答(復習)す。
(二)本時の內容につき談話練習をなす。
(三)教材を口唱して聽寫せしむ(一名は板上に書かしむ)。
(四)板上訂正を行ひ、個讀、齊讀によりて讀方を練習す。
(五)左の問答をなして、語句の關係を吟味し、意義の精究をなす。
(1)「ワルイコトデス」に枠をかけてどうすることが惡いのか。
(2)親に心配を掛ける事が惡いことだと誰れか敎へたか。
(3)「イッカ」とは如何なるとか。いつか先生が何とお話になつたといふのか。
(六)親に心配をかけてはならぬことを充分に敎訓し、實例を擧げて判斷せしむ。
(七)讀本の文章を讀ましめて、達讀練習をなす。

第三時

教材　全課の總練習。
要項　前時に仝じ。
教具　前時に仝じ。
教法
(一)教科書につき、讀方の復習をなす。
(二)教科書の挿繪につき意義を問答して復習す。
(三)本を離れて談話の練習をなす。
(四)左の文章を口唱して、書取らしめ、讀解練習をなす。
(1)ジカンニナリマシタ。ハヤク　イカナイト　センセイガマッテヰマス。
(2)イッカオトウサンガオハナシニナリマシタ、センセイニオマタセスルノハワルイコトデス。
(五)挿繪を觀察せしめて、說明文をかかしむ。
コドモガフタリアソンデヰマス。ヒトリハユビザシシテナニカオハナシヲシテヰマス。アチラニイヘガミエマス。

(六)達讀練習をなし、且つ外出先に於ける心得を問答す。

第五十二頁　(二時間)

要旨文體

鳥が、ねぐらに歸へる晩景を叙したる叙事的韻文である。挿繪を觀察せしめて、晩景を想見せしめ、美感を養ふと共に、既授文字、語句の讀解練習をなすのが本課の主眼である。

區分

第一時　挿繪の觀察と內容の教授及び「カラス」「オミヤ」「オテラ」「モリ」「ヤネ」等の語。

第二時　全文の讀方、書方、綴方練習。

第一時

教材　(自五十二頁一行至五十三頁六行)　カアカア……ナイテイク。

要項

內容＝鳥がねぐらに歸へる有樣、及び、晩景。

形式＝已授の文字の練習。

教具　教科書掛圖。

教材解釋

形式

(一)文章解剖

(1)カアカア　副　ト
(2)カラスカラス　副　呼掛獨立語
(3)オミヤノモリヘ　副　ト
カアカア　副　ト
カラスガ　主　補
ドコヘ　副
オテラノヤネヘ　副
カラスガ　主
ナイテイク。(單文、平叙文)　說
イク。(單文、疑問文)　說
ナイテイク。(單文、平叙文)　說

(二)修辭法

○「カアカア」は鳥の鳴聲をそのまゝ寫して、活現させたるものであつて、これを修辭

上聲喩法といふ。

○「ナイテイク」、「ドコヘイク」、「ナイテイク」の「イク」は脚韻である。脚韻法は前に説明してある。

○「カラスカラス」は重言である。重言法も前に説明してある。

教法

(一)教科書掛圖を提示して、左の問答をなし、内容の概念を整理す。

(1)鳥居、お宮、森、寺を指さし、こちらにあるのは何か。

(2)鳥を指して、ここを飛んで行く鳥は何か。

(3)鳥だといふことをどうして知るか。

(4)鳥は何といふて鳴くか。

(5)今この鳥が鳴いてゐるのだといふことは、どうして知れるか。

(6)鳥は何處へ飛で行くのか。……お宮とはどんな所か。森とはどんな所か。お寺とはどんな所か。やねとは家のどの部分か。

(7)鳥は何の爲めに、お宮の森や、お寺の屋根へ飛んで行くのか。

(8)されば、この繪は何時の所をかいたのか。

(二)談話せし要項を複演しつつ、「カラス」、「オミヤノモリ」、「オテラノヤネ」などの語句を書取らしむ。

(三)左の文章を提示して、讀解せしむ。

カラスガ　カアカアトナイテキマス。カラスハオミヤノモリヘナイテイキマス。オテラノヤネヘモナイテイキマス。

第二時

教法

(一)掛圖を提示して、前時の内容上の復習をなしつつ、「カラス」、「オミヤノモリヘ」、「オテラノヤネヘ」の語句を板書す。

(二)左の問答をなし、板書せる語句に、説明語、副詞等を添加して讀方を練習す。

(1)「カラスガ」に「ナイテイク」の説明語を附して、何となくいくかを問ひ、「カアカ

ア」の副詞を添へて意義を精究す。

(2)「カラスカラス」「ドコヘイク」を「オミヤノモリヘ」「オテラノヤネヘ」に書き加へて、讀ましめ、文章解剖に示したるが如く、主語及び説明語を書き加へて意義を明瞭にし、これ等の省略されたることに注意せしむ。

(3)「カアカア」と何が鳴いて行くかを問ひ、「カアカアトカラスガナイテイク」と書き意義を問答す。

(三)教科書を開かしめて、讀方を練習す。

(四)烏が何とないて行つたか。何處へ鳴いて行つたかを問答して話方を練習し、且かかしむ。

(五)唱歌の譜にて謠はしめて、趣味を起さしむ。

第五十四頁　(三時間)

要旨

既授の片假名を五十音圖に、排列したるものであつて、片假名の

劃然と區分す
第一時　ア行
第二時　ハ行
第三時　ナ行
第半濁音　ワ行
濁音及全部の練習をすべし。

總練習をなすのが主眼である。故に五十音圖によりて發音、及び文字の讀方、書方を十分に練習し、その記臆を確實にして、應用を自在ならしむる樣にせねばならぬ。

區分

本圖の如きものは、これを劃然と區分して、練習するも可なれども、又、區分することなく發音、又は讀方、書方、綴方等適宜に配合して、倦厭の情を起さざる樣注意して教授せねばならぬ。

教法

(一)本圖の教法は、兒童の程度と、學科の進度とによりて、これを定め、倦厭の情を起さざる樣工夫せねばならぬ。故に、格段なる教法を示さずに、ただ普通の方法數種を示すにより適宜相錯綜して用ふるを要す。

(二)五十音圖を提出して、一字宛指摘して讀ましむ(個讀又は齊

讀)。

(三)一行宛順次に讀ましめ、又は末行より行初に讀ましむ(個讀齊讀)。

(四)一列宛列順に讀ましめ、又は、列末より初列に讀ましむ(個讀又は齊讀)。

(五)諸種の言語、又は、事物の名稱を表はす文字を、五十音圖につき、發見せしめて讀ましむ。

(六)行順、又は、列順に口唱して、かき取らしめ、書方を練習せしむ。

(七)行末、又は、列末より口唱して、書き取らしめ、書方の練習をなす。

(八)或言語、又は、事物の名稱を綴らしめて、讀方、書方を練習す。

(九)暗誦を練習する爲め、面白き譜、又は、句調に唱へしむるは興味あり。工夫して練習せしむべし。

(十)「アイウエオ」といふ王樣と「カキクケコ」といふ王樣と「サシスセソ」に於て「タチツテト」といふ戰爭をお始めになりました。「ナニヌネノ」の王樣は「アイウエオ」にしたがひ、「ハヒフヘホ」の王樣は「カキクケコ」にしたがつて、はげしくたたかはれましたが、どちらも兵隊が同じ位で一向勝負がつかないものだから、「マミムメモ」の王樣と「ヤイユエヨ」の王樣とが仲にお這入りになつて、とうとう「ラリルレロ」といふ所に於て「ワヰウヱヲ」と和睦をなされましたなど、適宜の童話を構造して說明すれば、興味ありて五十音圖が無味乾藻に終る樣なことがなく、活動して面白いと思ふ。

(十一)五十音圖を淸書せしめて、書方の習熟を計るもよかるべし。

(十二)五十音圖を授くるには、音の系列といふことを忘れぬ樣

にして教授せねばならぬ。

(十三)五十音圖の練習を表示すれば左の如し。

五十音圖の練習
- 發音……一字、一行又數行。
- 讀方……縱横自在(諳誦)。
- 書方……行順、列順、又その逆(諳書)。
- 綴方……諸種の言語、事物の名稱。

毎時配當

尋常小學國語教授細案卷一 終

言語と觀念

附錄

範語教授の原理

吾々は如何にして言語を解するものであるか。假りに、此處に、某英國人が來て、(Boy)といつたとせよ。されば、英語を解せないものは、その言語は、何を意味してゐるかを了解することは、出來ないであらう。その上、その發したる音聲は、如何にして發せられたかをも了解することが、出來ないであらう。よし、その發音の方法は、どうにか了解せられて、その發音の眞似は出來たとしても、まだ、その言語を眞に了解したとは、云はれないのである。何故に、發音の眞似が出來ても、眞に言語の了解が出來ないのかといふに、その發音したる言語の(Boy)なるものが、果して、何を意味してゐるのか、又、何を指してゐるのか、それ等の關係が明瞭にな

らなければ、眞に言語の了解が出來たとは云はれないのである。即ち、(Boy)なる發聲は、「小兒」と云ふことを意味し、且つ、小兒を指したるものなることが了解せられて、始めて、その語の音と、その語の指示する事柄の意味とが、連合して、そして、言語の了解が出來たといふことが出來るのである。　故に吾々が言語を了解するといふことは、連續したる音(一音にて言語となるものあれども)を聞いて、その連續したる音に相當する觀念を意識界に喚起すると云ふことである。

言語と觀念とは約束的

言語を了解するといふことは、連續したる音、即ち語と、事物の意味とを結合したことで、通常、その語の意味が了解せられたと云ふのである。　全體、語の有する意義は、必然的に、その語に固定されてゐるもののやうに思はるるけれども、決して、その語、即ち、音聲そのものに、意味が必然的に固着してゐるのではない。　それ故に、英國人が小兒を意味したる言語を(Boy)と發音するからとて、吾日本人も、亦、小兒を意味する言語を(Boy)と發音せなければならぬと云ふことはない。　小兒なる觀念に於ては、何れの國の人も、殆んと同一であるげれども、其の觀念の符號たる言語は、同一ではない。　それで、語とその意味との關係は、人爲的で、約束的である。　これを換言すれば、事物の觀念は、特に言語の助を借らなくても、目に見、耳に聞き、觸覺や、嗅覺を用ゐて、其の事物に關する觀念を造ることの出來ると云ふことは心理學の示す所である。又、音聲の觀念も、聽覺や、筋肉感等の合力によつて出來ると云ふことも亦同じく心理學の示す所である。　それ故に、事物の觀念と音聲の觀念とは、別々に考ふることが出來るのであるが、この二つの觀念が相結合して、意味ある音聲、即ち、言語が出來るのである。

發音法の必要

此くの如く言語には必然的に、觀念が固着してゐないのであるから、「犬」の觀念を表はすには、我が日本人は「イヌ」といふ音聲を以てし、英國人は(Dog)「ドッグ」といふ音聲を以てする。けれども、その「犬」なる動物の觀念は、我等も、英國人も、殆んど同一であるのである。かくの如く、その觀念と言語とが異るを以て見れば、音聲と意義とは必然的のものでなくて、人爲的に定めたるに過ぎないと云ふことが明かである。

かくの如く二つの觀念を結合することは、處世上甚だ大切なることである。即ち、言語は觀念を把住して、思想の發達を助け、且つ、自己の思想を他人に傳ふるに肝要なものである。故に吾々は思想の符牒なる言語を正當に適切に使用して誤らぬ樣にせねばならぬ。この符牒を適切に正當に使用して行かんには、言語の原料となるへき音聲を正しくせねばならぬ、兒童をして正しく發音せしめんには發音學の示す所に從つて發音法を充分に研究せねばならぬ。それ故に、國語教授は、文字教授のみに重きを置かずして、發音法にも、注意せねばならぬのである。

教授上の注意

以上述べたることは、音聲を以て組立てられたる言語は、思想の符牒であつて、言語と思想との結合によりて知識の發達をなすことか出來るといふことを明かにしたのである。

言語と思想とは、極めて密接なる關係を有するものであるから、教授上に於ては、常に此の二の結合を容易ならしむると共に、此の結合を確實にすることを工夫せねばならぬのである。即ち範語教授に於て、圖畫を示したり、實物を直觀せしめたりするのは、言語と事物の觀念とを結合する方法に外ならぬのである。

圖畫又は實物標本等を觀察させて、思想の內容たる觀念を構成し、其の觀念の符牒となるべき言語を教へ、そして、言語と思想

との結合が一通り出來たなら、其の言語を分解して、其の言語の原料たる聲音の發音法を授け、再び其の聲音を連ねたる言語の抑揚强弱を示して、言語を正し、次に各聲音の符牒たる文字(音表文字)を提示して、其の文字の讀方、書方を授けねばならぬ。要するに範語教授に於ては、觀念を授くること、發音を練習すること、文字を教ふることの三つの仕事がある。今、以下少しく發音及び文字教授に就いて述べて見よう。

發音の教授には通常二つの仕事がある。即ち一つは單獨音の練習である。他の一つは言語としての發音練習である。從來の發音練習は只各音の發音練習のみを主としたやうであるが、それは、一方に偏したやり方で、各音の練習と共に、言語としての發音、練習も、また國語教授上極めて大切の事であるから、決して忽諸に附してはならないのである。何となれば、各單獨音の

各音の教授

言語としての發音教授

發音法と、言語としての發音法とは、多少其の趣を異にしてゐるからである。例へば「ハ」「タ」を單獨に別々に發音する時と、「ハタ」と連續して言語として發音する時とは、互に相異なつてゐる。それは、言語としては、連聲上、抑揚强弱があるからである。

第一各音の教授　各音の教授に就ては、次に示した發音法、及び、發音教授上の注意にあげたる事項を參照せられたし。兒童に發音法を授くるには、その發音に伴ふ口形、即口舌運動の有樣を示して、これを直觀せしめ、それに摸倣せしめて、そして、その發音の方法を自得さする樣にすることが最良策である。

第二言語としての發音教授　言語は、ウ(鵜)　ェ(繪)　ジ(字)　タ(田)　ハ(葉)　ャ(矢)　ワ(輪)などの如く單獨音より成れる言語もあるけれども、多くは數音相集り相結合して一の言語をなすものである。其の結合する時は、各音は、多少の變化をなすものであ

る、即ち「タマゴ」「ウマ」「イス」「ハタ」などのやうに、二音、若くは、三音の結合する場合には、是等の各音は、多少その前形をかへて、新に一の結合音を構成するのである、此くの如く、言語は、各音が、連續する時に前形を變化するばかりでなく、「アクセント」、即ち、抑揚强弱がありて、各音に著しき變化を及ぼし、單獨に各音を發音する時とは、其の趣が著しく異なるものである。「アクセント」は、連續音のみならず、單獨音に於ても、必要である。此の「アクセント」あるがために、言語をなすと云つても差支ないのである。同一の音聲を連ねても、「アクセント」の工合によつて、言語の意味を異にするものである。例へば、「ハタ」(旗)と「ハタ」(畠)「ハ」(葉)と「ハ」(齒)は、同一聲音の連續、又は、同一音なるに、談話に於て、それを誤らぬのは、「アクセント」によりて、區別するからである。それで、國語教授に於ては、單獨に各音の發音を練習すると共に、言語としての發音をも十分に練習せねばならぬのである。然るに、我國にては、此の「アクセント」が未だ一定してゐない。從つて、「アクセント」を示す符號も一定して居ないので、國語教授上、甚だ不便なるのみならず、國民教育上、國語の統一を、缺きて甚不都合である。けれども、現今は、過渡時代で、致方はないが、しかし、東京の中等社會に行はれる言語を以て、日本の標準語とすることに於ては、多數の人の賛成する所であるから、國定尋常小學讀本卷一にある範語には、東京の「アクセント」を附して置いたから、教授の際には、參考せられんことを望む。尤も「アクセント」は、單に一語中に存在するばかりでなく、一句、又は、一文章中にも、存するものである。けれども、これは、朗讀法の一定せざる限りは、彼是議論しても、無益である。これは、唯、文章語句の意義の輕重によりて斟酌したら、可ならんと思ふ。

文字教授

實例

第三文字教授　文字を授くるには言語の發音を正確に教授したる後、これを各音に分解し、そして、各音を表はす文字を知らしめて、發音と文字との結合を確固にせねばならぬ。

以上述べた如く、範語教授は、第一觀念を興ふること。第二言語を教授すること、言語教授には、單獨音の發音と連續音の發音とがある。第三には、文字を教授することの三段階を經過せねばならぬ。今、左に其の實例を示して說明せん。

今茲に新定尋常小學讀本卷一第一頁「ハタ」を教授するに當り、唯に「旗は布で作りたるものである」とだけのことを說明して「ハタ」なる言語を教へたりとて、言語の教授が完全正確に行はれたるものとは云はれない。多くの經驗を有する大人ならば、これだけにて完全なるものとならんも、未だ經驗の少き兒童に於ては、不明瞭たるを免れぬ。今「ハタ」なる觀念を正確に與へんには、各種の旗を直觀せしめて、其の特異點は抽象せしめ、其類同點は抽象せしめて、旗の觀念を明瞭確實にせねばならぬ。其の觀念が明確になつたら、「ハタ」なる言語を教へて、發音を練習せねばならぬ。此の發音は、「ハタ」と連續して發音せしめたり、或は、單獨に「ハ」「タ」と發音せしめたりするのである。即ち、分解して發音せしめ、總合して發音せしむるのである。次に「ハタ」なる言語の符號たる文字「ハタ」を教授し、これを書かしめ、讀ましめて練習せねばならぬ。此の文字教授の際も、矢張り、發音の練習は、怠つてはならぬのである。

以上述へ來りたる所を概括して表示すれば左の如くなる。

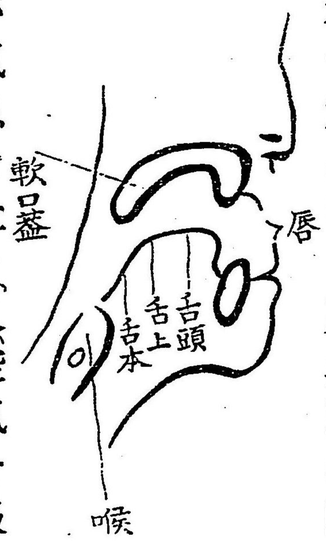
範語教授
- 音の模倣——記憶
- 事物の觀念
- 音の觀念と事物の觀念との聯合——記憶
- 音を表はす文字——記憶

發音法

音は言語の原料であつて、言語は音の集合であるから、苟も國語を學習し、又國語を教授しようと思ふものは、先づ音の何たるかを熟知せねばならぬ。即ち發音法の研究は、國語研究中の主要なる一の仕事である。殊に初學年の教授に於ては、その必要を感するのである。故に、此の卷末に於て國語教授上、特に必要なる發音法、及び、その教授上注意すべき事項を擧げて教授者の參考に供することにせん。

發音教授は、一寸容易なるものの樣であるけれども、正しき發音法を授くることは中々容易の仕事ではない。即ち土地の境遇周圍の事情などは、常に發音の上に大なる影響を及ぼして正しき言語の發達を妨ける。のである、故に適當なる發音の方法を示し、誤れる發音を矯正しようとするには、その由て來る所を明

かにせねばならぬ。即ち發音に伴ふ口形(口舌運動の有樣)を知らしむることが肝要である。故に教授者の參考のために左に口形の略圖を示して、これを說明しようと思ふ。今發音機關の位置を示す爲めに、口腔、鼻腔の斷面圖を示せば左の如くである。



吾々が氣息を吐き、又、空氣を吸ふ時には、其氣息が聲帶に當り、又は、口腔、鼻腔の諸部に觸れたりして、音を發するものであるが、言語の原料たる音は、吐出す氣息によつて、發するもので、吸込む息氣によりて發するのではないのである。氣息が肺臟から出でて喉頭の中にある聲門を通る時は、その聲門が閉ざされて

標準語教授

ある時は、氣息は、其の聲門を無理に押開きて通らんとするのであるから、聲帶が振動して初めて氣息は音聲となるのである。

言語の原料たる音數は、各〻國によりて、異なつてゐるから、一定することは出來ないけれども、我國の標準音は、凡百十音である。今、試に其の標準音を示せば左の通りである。

ア行	ア (a)	イ (i)	ウ (u)	エ (e)	オ (o)	
カ行	カ (ka)	キ (ki)	ク (ku)	ケ (ke)	コ (ko)	キャ (kya)
ガ行	ガ (ga)	ギ (gi)	グ (gu)	ゲ (ge)	ゴ (go)	ギャ (gya)
ガ行	ガ (nga)	ギ (ngi)	グ (ngu)	ゲ (nge)	ゴ (ngo)	
サ行	サ (sa)	シ (shi)	ス (su)	セ (se)	ソ (so)	シャ (sha)
ザ行	ザ (za)	ジ (zhi)	ズ (zu)	ゼ (ze)	ゾ (zo)	ジャ (ja)
タ行	タ (ta)	チ (chi)	ツ (tsu)	テ (te)	ト (to)	チャ (cha)
						チュ (chu)
						チョ (cho)
						ジュ (ju)
						ジョ (jo)
						ギュ (gyu)
						ギョ (gyo)
						シュ (shu)
						ショ (sho)
						キュ (kyu)
						キョ (kyo)

音の分類

ダ行	ダ (da)	ヂ (dhi)	ヅ (dzu)	デ (de)	ド (do)			
ナ行	ナ (na)	ニ (ni)	ヌ (nu)	ネ (ne)	ノ (no)	ニャ (nya)	ニュ (nyu)	ニョ (nyo)
ハ行	ハ (ha)	ヒ (hi)	フ (fu)	ヘ (he)	ホ (ho)	ヒャ (hya)	ヒュ (hyu)	ヒョ (hyo)
バ行	バ (ba)	ビ (bi)	ブ (bu)	ベ (be)	ボ (bo)	ビャ (bya)	ビュ (byu)	ビョ (byo)
パ行	パ (pa)	ピ (pi)	プ (pu)	ペ (pe)	ポ (po)	ピャ (pya)	ピュ (pyu)	ピョ (pyo)
マ行	マ (ma)	ミ (mi)	ム (mu)	メ (me)	モ (mo)	ミャ (mya)	ミュ (myu)	ミョ (myo)
ヤ行	ヤ (ya)	イ (yi)	ユ (yu)	エ (ye)	ヨ (yo)			
ラ行	ラ (ra)	リ (ri)	ル (ru)	レ (re)	ロ (ro)	リャ (rya)	リュ (ryu)	リョ (ryo)
ワ行	ワ (wa)	ヰ (wi)	ウ (wu)	ヱ (we)	ヲ (wo)	クヮ (kwa)	グヮ (gwa)	グヮ (ngwa)
	ン (n)							

音をその發聲法の如何によりて大別すれば、其の吐く息が聲音に觸れたるものと、鼻腔に觸れたるものと、口腔に觸れたるも

のとの三つとなる。今これを表示すれば左の如くである。

- 音
  - 口音
    - 母韻……聲帶の振動あり。
    - 子音
      - 清音……聲帶の振動なし。
      - 觸音……口腔及び聲帶の共働によりて發音せらる。
  - 鼻音……鼻腔又は聲帶の兩方に呼息が觸れて發する音である。

母韻

母韻は、氣息が聲帶に觸れて生ずるもので、その中の或一定數の聲律が、口内の或一定量の空氣と共鳴して起る音をいふのである。我國語の母韻は「アイウエオ」の五つである。

「ア」　口を割合に大きく開いて、舌を自然の位置(平垣)に置いて發音すれば、「ア」の音を發す。この場合には、舌は其の何れの部分も、上顎には觸れないのである。

「イ」　口を割合に小くして、舌頭を高くして發音すれば「イ」の音を發す。

韻

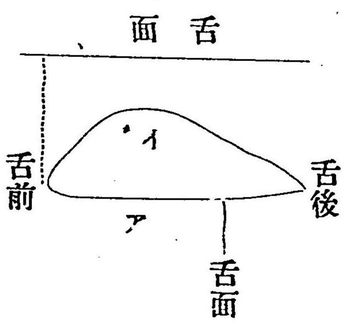
「ウ」　上下左右ともに、口を狹めて、舌後を高くして發音すれば、「ウ」の音を發す。

「エ」　「ア」と「イ」との中間音であるから、「イ」を發音しながら、上顎と下顎との間の角度を開いて、舌の隆起の度を次第にゆるめ、同時に口角を下に引くことを少しく減じて、發音すれば、「エ」の音を發す。

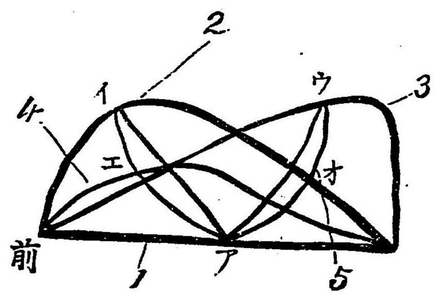
「オ」　「ア」と「ウ」との中間音であるから、「ウ」を發音しながら、舌を次第に低くし、口腔を圓形にして、聲帶の響を出せば、「オ」の音を發することが出來る。

今母韻を發聲する時の

(甲)



(乙)



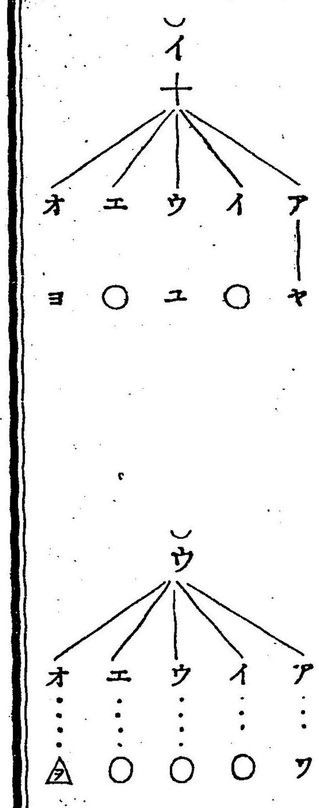
舌の位置形狀を圖示すれば前の如し。

(甲)圖に於て「ア」は舌面を平坦にして發音し、(イ)は更に舌前を高くすることを明瞭にしたるものである。

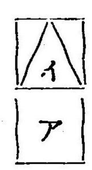
(乙)圖の(1)は舌面を平坦にして(ア)を發したる形、(2)は舌前を高くして(イ)を發したる形、(3)は舌後を高くして(ウ)を發したる形、(4)(5)は(エ)(オ)を發したる形なり。

半母韻と重母韻

半母韻には二つある。即ち、ゝイ(y)とゝウ(w)とである。これは、母韻を發する時よりも、更に、舌の位置を高くして、咽喉部の發聲作用を著しくすれば、一種の音が出る。これを半母韻と稱す。



重母韻



即ち(y)にアウオを結合すれば、ヤユヨとなり、(w)にアオを結合すればワヲとなる。

父音

也行の音の發聲は、甚だ母韻の「イ」に似て、和行の音の發聲は、甚だ母韻「ウ」に近い。更にこれに母韻を添へて二母韻相重なりて發するが如くするのを重母韻と名づけ、下に述ぶる拗音は、この重母韻に父韻が加つて出來た音である。

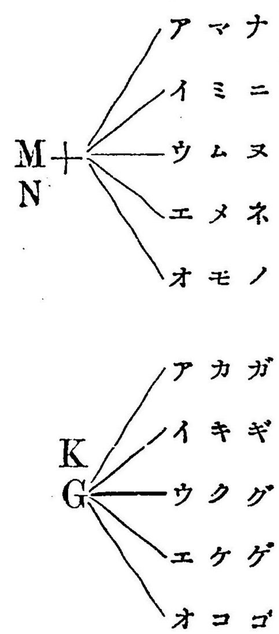
鼻音

父音を分ちて三種とす。即ち鼻音、破裂音、摩擦音である。

○鼻音とは肺から吐かれた氣息が、聲帶を振動しつゝ、鼻腔内を通過して、外部に出る時に發する音であつて、その發聲の位置によつて三つの種類がある。即ち唇内音、舌内音、喉内音である。

今これを表示すれば、左の如くなる。

鼻音
- 唇内音M サンポ
- 舌内音N サンテン
- 喉内音NG ホンコン



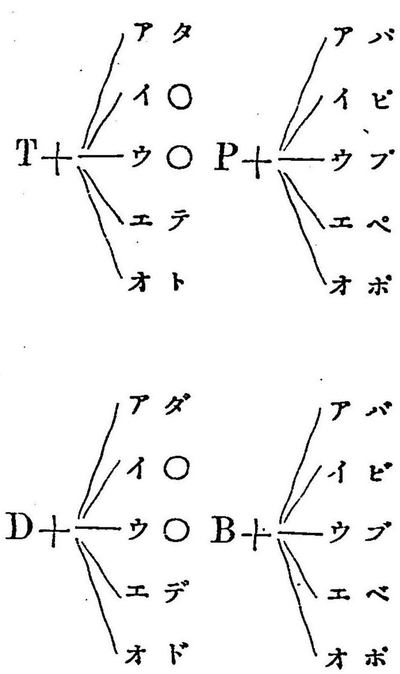
鼻音(ん)を表はす文字は、一つなれども、鼻音には右に示せるやうに、(M)(N)(NG)の三音がある。そして、これ等の三音が各母韻と相熟合すれば、マ行、ナ行、カ行の音を發す。即ち、上下の唇を全く閉ぢて、口腔内全體に蓄へたる空氣が、悉く鼻腔を經て外部に出る時、即ち(M)にアイウエオを配當すれば、マミムメモの音となる。舌端を齒ぐきに接して、それより内にある口腔中の空氣を鼻腔に出す時、即ち(N)にアイウエオを配當すれば、ナニヌネノの音を發す。

破裂音

鼻音(NG)を發しつゝ急に軟口蓋を以て鼻腔への通路を塞ぐ時は、(G)の音を發す。更に聲帶の振動を中止すれば、(K)の音となる。(K)とアイウエオと結合すれば、カキクケコとなる。又(K)の濁音(G)にアイウエオを結合すれば、ガギグゲゴとなる。

○破裂音　出て來る氣息を暫時塞ぎ止めて置いて、急に放せば一種の音が出來る。これを破裂音といふ。

破裂音
- 唇音 BP バ パ
- 舌音 DT
- 喉音 GK ガ カ

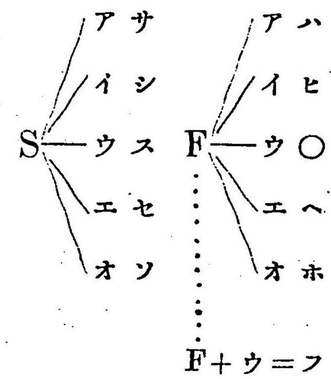


二音以上にてなりたるものを熟音といひ、熟音から母音を引

き去つたものを父音といふのである。

摩擦音

○摩擦音　氣息の通路をせまくして氣息と聲管とが摩擦する様に發聲すると、一種の音が出る。これを摩擦音といふ。



拗音

拗音とは二つの父音と一つの母韻と相結合して出來たる一種の子音である。

KIYA

Kya

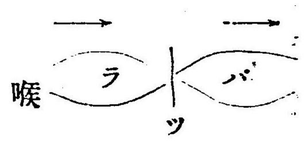
父音「B」「Y」と母韻「A」と結合して拗音「きゃ」が出來る

拗音を發するには、一父音に(y)父音又は(W)父音を結合すれば拗父音を生ず。これに母韻(ア)(ウ)(オ)を結合すべし。

母韻より破裂清音に移らんとする時の音の默止を正促音といふ。

促音と準捉音

音の移る時の閉止を示す圖



母韻より摩擦音に移らんとする時の微音を準促音といふ。

準促音

促音といふのは一種の音ではなく、上圖の如く甲音が乙音に移らうとする場合、呼息が急に閉止するのである。故にこの音を發するには呼息の閉止が緩慢となるときは促音とはならずして、只二音を早口に唱へた様になるから、上圖の如く、その閉止を強く、且つ急劇に發聲せねばならぬ。

（セン）
（イ）ッ

準促音は音の閉止が正促音に比し微弱にして、稍急劇ならざる發聲である。即ち圖の如く（ッ）の閉止が稍緩慢である。

【促音を發するのは唇と唇、或は前舌面と齒槽突起、又は後舌面と軟口蓋とを密閉して、已に發せんとする音聲を急劇にさへぎり、一時音聲の默止を起すのである。

父音を發する場合

父音を生ずる場合を口形の如何によりて、分類すれば左の如し。

第一唇　音　上唇と下唇との運動によりて生ずる音である。

第二舌　音　舌緣又は前舌面と齒槽突起とにて生ずる音である。

第三舌身音　中舌面と硬口蓋とにて生ずる音を云ふのである。

第四舌本音　舌の奥と軟口蓋とにて生ずる音である。

第五喉頭音　聲帶に息が摩擦して生ずる音である。

書中に說明したる發音は、この發音分類によりて、說明したものなれば教授の際は參照せられたし。

發音教授上の注意

(一) 發音教授の方法は、前に說明したるが如く、教師が適當なる發音をなして、模範を示すのであるが、その模範は、如何にして示すかといふに、只模範を示して聽覺のみに訴へて、模倣せしむることは、甚だ困難であるから、教師は、發音に伴ふ口形（口舌運動の有樣）を實際に看取せしめて、これに模倣せしめねばならぬ。故に、教師は、音の依て生ずる所を充分に研究して、口舌運動の有樣を巧に示す樣に注意せねばならぬ。

(二) 發音教授上最も困難なるは、單獨發音の場合よりも、連續發音の場合である。單獨發音の矯正法は、口形を示して自得せしむるにあれど、連續發音は、これを各單獨音に分解して練習し、

漸次二音三音と連續して練習せしめねばならぬ。

(三)母音は自餘、成熟音を構成する基礎となるものであるから、これが發音は正確明瞭に練習せねばならぬ。母音は單獨に發音せしむるよりも、他の成熟音と結合して、發音せしむることが肝要である。故に、先づ、他の成熟音と結合して發音せしめ、それに熟練してから、これを分離して、練習せしむる樣に注意せねばならぬ。

(四)「シ」と「ヒ」と「ラ」と「ダ」の如く混同し易き音は、適當なる發音を聽取せしむると共に、兩者を比較して、その異同の點を辨別せしむる樣に注意せねばならぬ。

(五)「ガ」行の音には前に示せるが如く、(ga)と(Nga)との區別あれば、この發音なき地方は特に注意して、二種の發音を區別し得る樣に教授することを忘てはならぬ。

新定讀本には拗音表は省かれたれど必ずこれを全く認めざるに省かれたためくれはれば適宜教授拗音者ざるにあかられたねし。

(六)音はその連接の如何によりて、發音上多少の變化を來たすことがある。即ち「マリ」と「タマ」の場合に於けるが如く發音にいくらかの差異を生ずるものであるから、種々他の諸音を冠らせ、又は、他の諸音を踏ませて、發音することを充分に練習せねばならぬ。

(七)五十音圖の教授は特に注意せねばならぬ。この音圖によりて語尾の變化、音の延約、系列等國語教授の基礎となるものなれば、縱横に讀み得る樣に練習せしめねばならぬ。

(八)拗音は現時の口語に於ては勿論、外國語の練習上、必要なるに拘はらず、その教授が、他の直音の教授に比べて、稍等閑に附せらるるは、甚遺憾の次第である。尤も拗音はこれを表はす文字は別にないけれども、音としては全く獨立の發音であるから、決してこれが教授を輕視してはならないのである。

(九)鼻音はこれを單獨に練習することは、困難であるから、母音と仝じく他の音と結合して練習する樣にせねばならぬ。

(十)促音は某音より某音に移る時の音の默止であるから、二音を授けて、後に授けねばならぬ。そして促音を發するには、その閉止を迅速に、强くせねば促音とならないから、呼息の閉止が緩慢ならざる樣に注意せなばならぬ。

(十一)音の抑揚、即「アクセント」に就ては地方によりて異なり、未だ我國にては一定したものはないけれども、成るべく、標準語として使用せらるる地方の抑揚に從ひて教授する樣にせねばならぬ。

(十二)發音の教授には、發音の位置を知らしむることが最必要である。即ち「パ」「バ」の發音を教ふるには、唇の使用の大切なることを知らしめねばならぬ、先づ兩唇を手にて抑へて發音せしむれば「パ」「バ」の音を發することと能はずして「ア」の音となる。此の場合に兩唇を使用せしむると明確に發音することが出來て、初めて、發音に要する部分の位置が、自得されるのである。又「サ」「タ」の發音も、初め舌の先端を抑へて發音せしめ、その發音の出來ざる時に、舌端を使用して、發音せしめ、そして、其の使用の位置を自得せしめねばならぬ。

範語のアクセント

○の符號は强く且あがる音。—の符號は平調。↓の符號は漸次にさがる、

ハタ(旗)　タコ(紙鳶)　コマ(獨樂)　パト(鳩)

マメ　コトリ　ハカマ　ハオリ

アメ(雨)　カサ　カラカサ　ハコ

サラ　カマ(釜)　マリ　カゴ

トラ　アサヒ　マツ(松)　ツル(鶴)

シカ。
ウシ。
ツノ。
サル。
カニ。
カキ。(柿)
タネ。
ニギリメシ
ハサミ
モノサシ
クシ。(櫛)
カガミ
ツキ。

クサ。
クモ。(雲)
マル。
ヒシガタ
シカク
ナシ。(梨子)
ミカン。
ナス。
ウリ。
タケ。
スズメ
ヤナギ
ツバメ

イケ。
フネ。
ホ(帆)
ホバシラ
イシ。
イス。
ハシ。(橋)
ハス。
ウマ。
クラ。
クルマ
ノミ。(鑿)
キリ(錐)

カンナ
ノコギリ
ネコ。
イヌ。
クビ。
スズ。(鈴)
ハチ。(鉢)
ツボ。
クチバシ
ヒバチ。
ヒバシ。
ゴトク
テツビン。

ヒノシ
コテ。(熨)
キヌ。(絹)
モメン
シロヌノ
ヒモ。
イト。
スギ。
ヤネ。
ノハラ
ミチ。
フエ。
カタナ

ナギナタ
アシダ。
ランカン
タ。(田)
ハタケ。
アゼ

ウネ
イネ。
ムギ。
イモ。
タイゴン
ミセ。

ノレン
カンバン
アカ。(赤)
アヲ。(青)
キ(黃)
ムラサキ

タヒ
コヒ
フナ
ヒレ。
ウロコ。
ヒダリ

ミギ。
マヘ。
ウシロ。
カラス。
ウサギ。
カメ。(龜)

本巻中にある形式の分類

本巻中にある形式を通覽すれば、凡そこれを左の各項に分類することを得、即ち、

(一)單語

(二)短句

(1)領格の天爾乎波「ノ」にて名詞を接續したる語句。

(2)天爾乎波「ト」を以て事物を並列したる語句。

(3)天爾乎波「ニ」を以て事物を並列したる語句。

(4)物名の上に形容詞をつけて修飾したる語句。

(三)文章

(1)單文

(2)複文

(3)混文

である。尚卷中の教材をこの項目によりて分類すれば、左の通である。

(一)單語

第一頁「ハタ」より第九頁「ツノ」までは全く單語のみからなつてゐる。

(二)短句

(1)領格の天爾乎波「ノ」にて名詞を接續したる語句。

シカノツノ。ウシノツノ（第四頁）

カキノタネ（第十頁）

キクノゴモン。キリノゴモン（第十六頁）

(2)天爾乎波「ト」を以て事物を並列したる語句。

サルトカニ（第十頁）

クシトカガミ。ハサミトモノサシ（第十一頁）

ナシトミカン。ナストウリ（第十三頁）

(3)天爾乎波「ニ」を以て事物を並列したる語句。

タケニスズメ。ヤナギニツバメ（第十四頁）

イケニフネ。フネニホ。ホバシラニハタ（第十五頁）

クビニスズ。（第十七頁）

(4)物名の上に形容詞をつけて修飾したる語句。

クロイネコ。シロイイヌ（第十七頁）

アサイハチ。フカイツボ。ホソナガイクチバシ（第十八頁）

(三)文章

(1)單文

(イ)主語と說明とよりなれる單文。

ホン(主)ガ アリマス(說)。テホン ガ アリマス。フデ ガ アリマス。

(第十九頁)

トンボ(主)ガ トンデキマス(說)。セミ ガ ナイテキマス。(第二十頁)

ユリノハナガサキマシタ(說)(第二十三頁)

コメヤノトナリハ サカナヤデス。サカナヤノトナリハ コマモノヤデス(說)(第三十四頁)

アカイトリキガ(主)ミエマス(說)。タカイイシダンモミエマス(第二十五頁)

アレガ グンキデス(說)(第二十八頁)

ソラ ガ クモツテキマシタ。カミナリ ガ ナリダシマシタ。(第三十六頁)

アサガホ ガ サキマシタ(說)(第四十頁)

カネ ガ ナル。ヒケシ ガ トンデイク(說)(第四十六頁)

(ロ)主語、客語、說明語を有する單文。

ネエサン(主)ガ エヲ(客)ミテキマス(說)。(第二十七頁)

ニイサン ガ ジヲ カイテキマス。(仝上)

アノ ハタヲ ゴランナサイ(說)(第二十八頁)

(ハ)主語、說明語、說明語の修飾語(副詞)を有する單文。

オヤドリ(主)ガ コココト(副) ヨンデキマス(說)。(第二十四頁)

ヒヨコ(主)ガ ピヨピヨト(副) ナイテキマス。(仝上)

カア カア カラス(主)ガ ナイテイク(說)。(第五十二頁)

オミヤノモリヘ、オテラノヤネヘ、カア カア カラス(副)ガ ナイテイク。(仝上)

主　ヨイオヂイサンハ　副詞句　コブヲ　トラレテ　説　ヨロコビマシタ。（第四十四頁）
主　ワルイオヂイサンハ　副詞句　コブヲ　トラレテ　説　コマリマシタ。（第四十五頁）

(二) 主語、客語、説明語、説明語の修飾語(副詞)を有する單文。

客　クルマニ　ツンダタカラモノ　主　イヌガ　説　ヒキダス　副詞　エンヤラヤ（第三十八頁）
サルガ　アト　オス　エンヤラヤ（第三十九頁）
キジ　ガ　ツナ　ヒク　エンヤラヤ（仝上）

(ホ) 主語、補足語、説明語を有する單文。

補　モリノナカニ　主　オミヤガ　説　アリマス（第二十五頁）
補　キノエダニ　カタツムリ　補　ガ　キマス（第二十六頁）
ベンケイガ　ウシワカマルニ　マケマシタ。（第三十頁）
補　カドニハ　ゴフクヤガ　アリマス。（第三十五頁）

(へ) 主語の省略

主省　副詞　ソロソロ　説　オアルキ　ナサイ（第二十二頁）
主　デヲヒイテ　アゲマス（仝上）
補　主　キレイデ　ゴザイマス（仝上）
補　ケライニナリマシタ（第三十一頁）
副詞　主　ドコデモ　客　オモシロイウタ　ヲ　説　ウタツテキマス（第三十三頁）
副　主　イクツ　サイタカ　説　カゾヘテ　ゴラン　ナサイ（第四十一頁）
副　主　アチラカラモ　副　一ヒキ　説　キマス。（第四十二頁）
副詞　主　アハセテ　五ヒキ　補説　デス（第四十三頁）
主　ポンプヲ　ヒイテ　説　ハシル（第四十六頁）
主　ハシゴヲ　カツイデ　イソグ。（第四十七頁）
主　補　ユフガタ　ニ　ナリマシタ（第五十頁）

(ト) 説明語の省略。

補　カゼニ　副　クルクル　カザグルマ　説省　（第二十九頁）

ミヅニ　グルグル　ミヅグルマ　説省　（仝上）

オヂイサンハ　ヤマヘ　シバカリニ　説　（第三十七頁）

オバアサンハ　カハヘ　センタクニ　説　（仝上）

(チ) 獨立部を有する單文。

獨立節　デンデンムシムシ　ツノダセ　ヤリダセ　（第三十六頁）

ヒゴヒ　ガ　一ピキ　二ヒキ　三ピキ　四ヒキ　四ヒキヰマス　（四十二頁）

一ペン　二ヘン　三ペン　四ヘン　五ヘン　六ペン　七ヘン　八ヘン　九ヘン　十ペン　主　十ペン　説　（第四十九頁）

サア　タケヲサンカラ　オトビナサイ　（第四十九頁）

カラス　カラス　主　ドコヘ　イク。（第五十二頁）

(リ) 主語の並列したる單文。

主　アカイノヤ　シロイノヤ　主　イロイロ　副　マジツテ　説　キマス　（第四十一頁）

(ヌ) 補語の並列したる單文。

補　アチラデモ　コチラデモ　補　タノクサヲ　客　トツテキマス　説　（第三十二頁）

(2) 複文

(イ)

副詞節

主　ワタクシガ　コチラノハジヲ　客　モツカラ　説　アナタハ　主　ソチラノハジヲ　客　オモチ　説　ナサイ　（第四十八頁）

(ロ)

副詞節

主　ハヤク　副　カヘラナイ　説　ト　オカアサンガ　主　シンパイシマス　説　（第五十頁）

(3) 混文

(イ)全文の形は單文であつて、其の中の補足語に複文を有する混文。

副	主	補	客	説	(主)	補	説
イツカ	センセイガ	(オヤニシンパイヲ	カケルノハワルイコトデ				
ス) ト	オハナシ	ニ	ナリマシタ	(第五十一頁)			

附錄終

小學校書
614

明治四拾參年壹月廿五日印刷
明治四拾參年壹月廿八日發行

尋常小學國語教授細案卷一
定價金六拾錢

普通教育研究會　編纂

發行者　松邑孫吉　東京市京橋區南鍛冶町一番地
印刷者　青木弘　東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地
印刷所　株式會社秀英舍第一工場　東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地

不許複製

關東發賣元　東京市京橋區南鍛冶町　三松堂
關西發賣元　大阪市東區備後町四丁目　寶文館